

助詞・助動詞索引



か

- 二〇四 いかなりける御心のうちにかと哀に心ほそけれ
- 一一〇 別路に茂りもはてゝ葛のはのいかてかあらぬかたに返りし
- 一九三 跡は千年と誰かいひ劍
- 二二七 いかなることにかありけん
- 二二三 かくらむのちはなにゝかはせん
- 二五二 いかなるゆへにかとおぼつかなし
- 二五四 風にたゝよふ白雲を天津乙女の袖かとそみる
- 二八〇 唐家驪山宮かとおどろかれ
- 三二九 権化力をくはふるかとありがたくおほゆ

が

- 三〇 かの満誓沙弥が比叡山にて此海を望つゝよめりけん歌
- 四九 この宿にこそとまりけるが今はうちすぐる
- 六七 班婕妤が团雪の扇
- 六八 西行が道のへに清水なかるゝ柳かけ……とよめるも
- 一〇 源義種が此国のかみにてくだりける時
- 一一 大江定基が家を出けるも哀に思ひいでられて
- 一五 御前にまいりたりけるがもしこの本意をとげて
- 一八 罪ありて東へくだられけるに此宿にとまりけるが
- 二〇 かの業平がす行者にことづてしけん程はいづくなるらん
- 二〇 四 むかし叔斎が首陽の雲に入て

二〇 許由が潁水の月にすみし

二二 一人にたづぬれば梶原が墓となむこたふ

二二 四 羊太傳が跡にはあらねども

二二 一〇 うたれにけりときゝしがさはこゝにて有けるよ

二三 八 此関にいたりてとどまりけるが

二三 九 つかさにて行けるが漁舟の火のかげは寒くして

二五 都良香が富士の山の記に書たり

二六 二 布をひけるがごとし

二七 能因入道伊予守実綱が命によりて

二九 あやしの賤が庵をかりてとどまりぬ

三二 蘇武が漢を別し十九年の旅の愁

三三 李陵が胡にいたりし三千里の思ひ

cf. わ

かし

- 三五 ふるき皇居の跡ぞかしとおぼえてあはれなり
- 一六 流ぞかしとおもふにも
- 二四 旅の空ぞかしなど打ながめられつゝ

かな

- 一九 日数ふる旅のあはれは大井河わたらぬ水も深き色かな
- 二七 見渡せば千本の松の末遠みみとりにつゝく波のうへ哉
- 二九 涙もよほす滝のをとかなといへる
- 二九 夫ならぬたのみはなきを古郷の夢路ゆるさぬ滝の音哉

三四③都を急ぐ今朝なれとさすかなこりのおしき宿哉

き

き

七⑬しらすりき秋の半の今宵しかもかゝる旅ねの月をみるとは

二②成王の三公として燕と云国をつかさどりき

一五⑤言のはの深き情は軒端もる月のかつらの色にみえにき  
し 困

一⑫十余の日数をへて鎌倉に下り着きし間

三⑦天津の宮のあれしより名のみ残れるしかのふる郷

三⑬世中を漕行舟によそへつゝなかめし跡を又そなかむる

四⑫行人もとまらぬ里となりしより荒のみまさるのちの篠原

六④音にきゝしきめが井を見れば

七②後京極撰政殿の荒にしのははたゝ秋の風とよませ給へる

一〇⑩花ゆへにおちし涙のかたみとや稲葉の露を残しをくらん

一一⑤あかぬ別をおしみしまよひの心をしもしるべとし

一一⑧葛のはのいかてかあらぬかたに返りし

一一②陝のにしのかたを治し時

一一⑤召公去にし跡までも

一一③植置しぬしなき跡の柳はら猶その陰を人やたのまん

一一③昔よりよくなるかたなかりし程に

一四②きゝわたりしかひありてけしきいと心すごし

一四⑩此宿に一夜とまりたりしやどあり

一四⑬君どもあまたみえし中に

一四⑭うち詠じたりしこそ心にくくおぼえしか

一七⑥名残おほかりし橋本の宿にぞ相似たる

一七⑫いさゝかおもひつゞけられし

一八⑨中御門中納言宗行と聞えし人の

二一①許由が潁水の月にすみし

二二⑩そのかたはらにかきつけし

二二⑩うたれにけりときゝしがさはこゝにて有けるよと

二二三②あはれにも空にうかれし玉梓の道のへにしも名をとゝめ

けり

二四⑨かけてもおもはざりし旅の空ぞかし

二八④せきかけし苗代水の流きて又あまくたる神その神

三〇⑤こしかたに名高く面白き所々にもをとらずおぼゆ

三〇⑥過こしかたの浦々もひとつなかめの沖のつり舟

三〇⑩さりにし治承のすゑにあたりて

三二⑧道場のあらたなるをひらきしより

三三①過にし延応の比より

三三⑭帰べきほどとおもひもむなしく過行て

三三①李陵が胡にいりし三千里のみちの思ひ

三三②聞なれし虫の音もやゝよはりはてて

三三⑦かへるへき春をたのむの雁かねもなきてや旅の空に出に

し

しか

一五①うち詠じたりしこそ心にくくおぼえしか

## けむ

## けむ困

- 二④遊子猶残月に行けん函谷の有様  
 三⑩此海を望つゝよめりけん歌おもひ出られて  
 五⑨草の庵のねぎめもかくや有けむと哀なり  
 一⑤誠の道におもむきけんありがたくおぼゆ  
 二⑨御製をたまはせたりけるも此こゝろにや有けん  
 一⑫かの召公を忍びけん国の民のごとくに  
 一⑪覚束ないさ豊河のかはる瀬をいかなる人のわたりそめけ

## ん

- 一八⑭今は限とてのこし置けむかたみさへ  
 一九③跡は千年と誰かいひ剣  
 一九⑨かの紅葉みだれてながれけむ菴田川ならねども  
 二〇④す行者にことづてしけん程はいづくなるらん  
 二二③口ずさみ給へりけん年々に春の草のみ生たりといへる詩  
 二二⑦いかなることにかありけん  
 二二⑨ひとまどものびんとやおもひけむ  
 二五⑦冴る夜に誰こゝにしもふしわひて高ねの雪を思ひやりけ  
 二七⑧かくやありけむとおぼゆ  
 けむ困  
 四⑪成行など聞こそ……飛鳥の河の淵瀬にはかぎりざりけめ  
 とおぼゆ

## けり

## けり困

- 二⑦大和歌を詠じておもひを述けり  
 三⑤大津の宮をつくられけりとときくにも  
 七①萱屋の板庇年経にけりとみゆるにも  
 八⑬はじめは出雲国に宮造りありけり  
 八⑭大和言葉も是よりはじまりけり  
 九④大江匡衡といふ博士有けり  
 一〇⑥玉くしけ二村山のほのくくと明行末は波路なりけり  
 二⑤おもき罪をもなだめけり  
 二⑥うたをなんつくりけり  
 一四①岩つたひ駒うち渡す谷川の音もたかしの山にきにけり  
 一五⑤まひざはの原と云所に来にけり  
 一五⑬鎌倉へくだる筑紫人有けり  
 一六①心のうちに申置て侍りけり  
 一八⑩ある家の柱にかゝれたりけりと聞きたれば  
 一九②かきつくるかたみも今はなかりけり  
 二二②道のかたはらの土と成にけりと見ゆるにも  
 二二⑩駿河国きかはといふ所にてうたれにけりとときゝしが  
 二三③空にうかれし玉梓の道のへにしも名をとゞめけり  
 二三⑦東にて謀反おこしたりけり  
 二四④清見かた磯へに近きたひ枕かけぬ浪にも袖はぬれけり  
 二五③冬の朝簾をあげて峯の雪を望けり

二八⑦ 菅根の山にもつきにけり

ける 囿

二⑤ むかし蟬丸といひける世捨人

二⑦ 嵐のかぜはげしきをわびつゝぞすぐしける

二⑧ 蟬丸は延喜第四の宮にておはしけるゆへに

二⑫ 東三条院石山に詣て還御ありけるに

二⑬ 関の清水を過させ給ふとてよませ給ひける御歌

二⑭ いかなりける御心のうちにかと哀に心ばそけれ

四⑨ この宿にこそとまりけるが

五① 老をいとひてよみける歌の中に

九⑤ 当国の守にて下りけるに

九⑥ 此宮にて供養をとげける願文に

一〇⑧ 在原業平かきつばたの歌よみたりけるに

一〇⑧ かれるのうへになみだおとしける所よと

一〇⑬ 源義種が此国のかみにてくだりける時

一〇⑬ とまりける女のもとにつかはしける歌に

一〇⑭ 女のもとにつかはしける歌に

一一① 恋しとのみや思ひわたらんとよめりけるこそ

一一③ こゝにありける女ゆへに

一一③ 大江定基が家を出けるも哀に思ひいでられて

一二⑦ 後三条天皇東宮にておはししけるに

一二⑨ 御製をたまはせたりけるも此こゝろにや有けん

一五⑪ 御堂など朽あれにけるにや

一五⑬ 此観音の御前にまいたりたりけるが

一六① 鎌倉にて望むことかなひけるによりて

一六① 御堂を造けるより

一八⑩ 罪ありて東へくだられけるに此宿にとまりけるが

一八⑩ 罪ありて東へくだられけるに此宿にとまりけるが

一八⑭ かたみさへあとなくなりけるこそはかなき世のならひ

二一① おほきなる卒都婆の年経にけると見ゆるに

二二⑦ かたはらに人なくぞみえける

二二⑨ 都のかたへはせのぼりけるほどに

二二⑩ さはこゝにて有けるよと哀に思ひあはせらる

二二⑫ かの志戸と云処にてかくれさせ御座しける御跡を

二二⑭ なにゝかはせんとよめりけるなどうけ給はるに

二二三 民部卿忠文をつかはしける

二二三 此関にいたりてとどまりけるが

二二三 軍監と云つかさにて行けるが

二二三 民部卿泪をながしけると聞にもあはれなり

二五② 心ありけるたび人のしわざにやあるらん

二六⑧ 蓬萊の三の嶋のごとくに有けるによりて

二八① 命によりて歌よみて奉りけるに

二八② たちまちに縁にかへりけるあら人神の御なごりなれば

けれ ㊦

五③ 宿もからまほしく覚えけれども

二二⑧ 身をほろぼすべきなりにければ

二二三 山をすぐと云唐の歌を詠じければ

いぢ

二⑭ きこゆるこそいかなりける御心のうちにかと哀に心ばそ  
けれ

四⑨ この宿にこそとまりけるが

四⑩ 成行など聞こそかはりゆく世のならひ飛鳥の河の淵瀬に  
はかぎらざりけめとおぼゆ

六⑨ 道のへに清水なかるゝ柳かけしはしとてこそたちとまり

つれ

九⑦ かきたるこそ哀に心ばそく聞ゆれ

一一① よめりけるこそおもひ出られてあはれなれ

一二⑭ その本意はさだめてたがはじとこそおぼゆれ

一三⑧ めうかれんこそかの伏見の里ならねどもあれまくおしく  
覚ゆれ

覚ゆれ

一四⑭ うち詠じたりしこそ心にくくおぼえしか

一六⑪ 多かりと聞こそ彼巫峡の水の流おもひよせられていと危  
き心ちすれ

き心ちすれ

一八⑭ あとなくなりけるこそはかなき世のならひいとどあは  
れにかなしけれ

れにかなしけれ

二九⑩ うち過ぬるこそいと心ならずおぼゆれ

三二⑥ たぐひなき仏像とこそまきこゆれ

三三⑧ 金銅木像のかはりめこそあれども

いと

いとし

一六⑤ 弘誓のふかき事うみのごとしといへるも

二六② 布をひけるがごとし

いとくなり

いとくに

一一⑫ 国の民のごとくにおしみをだてて

二六⑧ 蓬萊の三の嶋のごとくに有けるによりて

いとす

させ

一二⑫ 関の清水を過させ給ふとて

二二⑫ かの志戸と云処にてかくれさせ御座しける御跡を

二八⑫ うき身の行衛するべさせ給へなど

いと

一三⑤ その宿は人の家居をさへ外にのみうつすなど

一八⑭ 今は限とてのこし置けむかたみさへあとなくなりける

し

六③ 我もとゆひに置霜も名にしおいその杜の下草

七⑬ しらさき秋の半の今宵しもかかる旅ねの月をみんとは

一五⑤まよひの心をしもしるべとし誠の道におもむきけん  
 一四⑥月のかげ曇なくさし入たる折しも君どもあまたみえし中

に

一七⑦是も心とまらずしもあらざらましなどはおほえて

二三③あはれにも空にうかれし玉梓の道のへにしも名をとぐめ

けり

二五⑥冴る夜に誰こゝにしもふしわひて

三三⑪心とまらずしもはなけれども

三三④都のかたをながめやる折しも一行の雁がね空に消ゆく

じ

六②かはらしな我もとゆひに置霜も

一一⑬その本意はさだめてたがはじとこそおぼゆれ

二二④ふるきつかとなりなば名だにも残らじとあはれ也

二八⑭今よりは思ひ乱し蘆の海の深きめくみを袖にまかせて

つて

一②なすことなくして徒にあかしくらすのみにあらず

三⑭草の原露しげくして旅衣いつしか袖のしづくところせし

四⑦南山の影ひたさねども青くして渾漑たり

四⑩今はうちすぐるたぐひのみ多くして家居もまばらに成行

一一⑨よもの望かすかにして山なく岡なし

一五⑤北南は眇々とはるかにして西は海の渚近し

二二⑦かたへの憤ふかくしてたちまちに身をほろぼすべき

二三⑩漁舟の火のかけは寒くして浪を焼

二五⑨青して天によれるすがた絵の山よりもこよなくみゆ

二七⑦夜のやどりありかことにして床のさむしろもかけるばか

りなり

二九⑭うしろは山ちかくして窓にのぞむ

しむ

しめ圍

七⑪幽吟を中秋三五夜の月にいたしましたしめ

一四⑥行人心をいたましめとまるたぐひ夢をさまさず

しむ圍

一七⑥北には長松の風心をいたましむ

す

せ圍

二⑬関の清水を過ぎせ給ふとてよませ給ひける御歌

七②たゝ秋の風とよませ給へる歌

二⑨風月の遊びといふ御製をたまはせたりけるも

二二⑪讃岐の法皇配所へおもむかせ給ひて

す

さら圍

一七⑦是も心とまらずしもあらざらましなど

す圍



- 一⑤ 金帳七葉のさかへをこのまずたゞ陶潜五柳のすみかを  
 一⑭ わすれず忍ぶ人もあらば  
 五⑤ しらぬ翁のかけはみすとも  
 六① はかなく移る月日なれば遠からずおぼゆ  
 八⑪ 驚むらのかずもしらず梢にきゐるさま  
 九⑩ 法の形見をたむげをかすは  
 二④ そのもとをうしなはずあまねく又人の患をことほり  
 二⑥ 彼木を敬て敢てきらすうたをなんつくりけり  
 一⑤ 錦花繡草のたぐひはいともみえず白き真砂のみ  
 一⑤⑩ いつのころよりとはしらず此原に木像の観音  
 一⑤⑫ 草の庵のうちに雨露もたまたらず年月を送るほどに  
 一⑥② 聞あへずその御堂へ参りたれば  
 一⑦⑦ 昨日のめうつりなからずは  
 一⑦⑦ 是も心とまらずしもあらざらまし  
 一⑨⑥ 一すぢならず流わかれたる川瀬ども  
 二② 煙たてたるよすがもみえず柴折くぶるなぐさめまでも  
 二②⑧ 此庵のあたり幾程遠からず峠と云所にいたりて  
 二⑤⑨ いまだ白妙にはあらず青して天によれるすがた  
 二⑥⑬ 海の渚遠からず松はるかに生わたりて  
 三①⑤ 名高く面白き所々にもをとらずおぼゆ  
 三②② 四季の御かぐらをこたらず職掌に仰せて  
 三③①① 心とまらずしもはなけれども
- ざり 四
- 四①① 飛鳥の河の淵瀬にはかざりざりけめとおぼゆ
- 七⑬ しらざりき秋の半の今宵しもかかる旅ねの月をみるとは  
 二④⑨ 袖のしづくまではかけてもおもはざりし旅の空  
 ず 四
- 一② 徒にあかしくらすのみにあらず  
 三③ いまだ夜のうちなればさだかにも見わからず  
 六⑧ 立さらん事はものうくて更にいそがれず  
 一④⑥ とまるたぐひ夢をさまさずといふ事なし  
 一⑦② 世中の人の心のたくひとは見す  
 一⑧⑬ 火のためにやけてかの言のはものこらすと申ものあり  
 二①③ つたかえではしげりてむかしのあととはたえず  
 二④② 夜もすがらいねられず  
 二⑦② 一葉の舟中万里身とつくれるに彼も是もはづれず  
 三①③ 崇神のいつくしみ本社にかはらずと聞ゆ
- ぬ 四
- 一③ 住みはつべしとおもひさだめぬありさまなれど  
 一⑩ まだしらぬ道の空山かさなり江かさなりて  
 四⑫ 行人もとまらぬ里となりしより  
 五⑤ けふは過なん鏡山しらぬ翁のかけはみすとも  
 五⑩ 都出ていくかもあらぬこよひたに  
 六⑫ しはしすゝまぬ旅人そなき  
 六⑭ 日影もみえぬ木の下道あはれに心ぼそし  
 八③ 往還のたぐひ手毎にむなしからぬ家づとも  
 八⑤ 花ならぬ色香もしらぬ市人の徒ならてかへる家つと  
 八⑤ 花ならぬ色香もしらぬ市人の徒ならてかへる家つと

- 一〇⑭もろともにゆかぬ三河の八はしを
- 一一⑮あかぬ別をおしみしまよひの心をしもしるべとし
- 一九⑰大井河わたらぬ水も深き色かな
- 二〇⑱さしておもひはなれたる道心も侍らぬうへ
- 二三⑲この関遠からぬほどに興津といふ浦あり
- 二四⑳たひ枕かけぬ浪にも袖はぬれけり
- 二五㉑ふじの高ねを見れば時わかぬゆきなれども
- 二九⑥夫ならぬたのみはなきを古郷の
- 二九⑦古郷の夢路ゆるさぬ滝の音哉
- 二九⑧雨俄にふりてみかさもととりあへぬほど也

## ざる困

- 六⑥余熱いまだつきざる程なれば
- 三三⑧はからざるにとみの事ありて都へかへるべきになりぬ

## ね

- 四⑥南山の影をひたさねども青くして滌瀧たり
  - 一一④人の発心する道その縁一にあらねども
  - 一三⑨かの伏見の里ならねどもあれましくおしく覚ゆれ
  - 一四⑩行とまる旅ねはいつもかはらねと
  - 一九⑨紅葉みだれてながれけむ菴田川ならねども
  - 二一④いはねどしるくみえて中々あはれに心にくし
  - 二二⑤羊太傳が跡にはあらねども
  - 二三①しもぎまのものの事は申をよばねども
  - 三三⑩錦をきるさかひはもとよりのぞむ処にあらねども
- cf. いくばくならー・かずならー・ころならー・しかのみ

ならー・おもはぬほかに

## ぞ

- 二⑦嵐のかぜはげしきをわびつゝぞすぐしける
- 二⑭ゆきあふ坂の関水にけふをかきりの影そかなしき
- 三⑤此ほどはふるき皇居の跡ぞかしとおぼえて
- 三⑬なかめし跡を又そなかむる
- 六⑫木陰の清水むすふとてしはしすゝまぬ旅人そなき
- 八②けふは市の日になむあたりたるとぞいふなる
- 一〇①いそく汐干の道そくるしき
- 一〇⑩かの草とおほしき物はなくていねのみぞおほくみゆる
- 一三⑥人の家居をさへ外にのみうつすなどぞいふなる
- 一三⑬壺川とぞ云
- 一四⑩旅ねはいつもかはらねとわきて浜名の橋そ過うき
- 一六②人多くまいるなんどぞいふなる
- 一六⑬人の心にくらぶればしづかなる流ぞかし
- 一七⑥名残おほかりし橋本の宿にぞ相似たる
- 一七⑩いまの浦に昨日の里の名残をそきく
- 一七⑬ゆふたすきかけてそ頼む
- 一九④こはまとぞいふなる
- 二二⑦かたはらに人なくぞみえける
- 二四⑨かけてもおもはざりし旅の空ぞかしなど
- 二四⑫岩つたひ浪わけ衣ぬれくそ行
- 二五⑭白雲を天津乙女の袖かとぞみる

- 二八⑤又あまくたる神そこの神
- 三二⑬日をふるまゝにはたゞ都のみぞこひしき
- 三三③峯のあらしのみぞいとゞはげしくなりまされる

cf. これーこの

だに

- 五⑪都出ていくかもあらぬこよひたにかたしきわひぬ床の秋

風

- 二二④ふるきつかとなりなば名だにも残らじと
- 二四⑤まどろむ間だになかりつる草の枕のまるぶしなれば

たり

たら困

- 一一⑩一千余里を見わたしたらんこゝちして

たり困

- 一〇⑧在原業平かきつばたの歌よみたりけるに
  - 一一⑨風月の遊びといふ御製をたまはせたりけるも
  - 一四⑪此宿に一夜とまりたりしやどあり
  - 一四⑭忍びやかにうち詠じたりしこそ心にくくおぼえしか
  - 一五⑮此観音の御前にまいりたりけるが
  - 一八⑲ある家の柱にかゝれたりけりと
  - 二三⑦将門と云もの東にて謀反おこしたりけり
- たり困
- 一③身は浮雲に似たり首は霜ににたりと書給へる

- 一④身は浮雲に似たり首は霜ににたりと書給へる
- 二⑨此関のあたりを四宮河原と名付たりといへり
- 九⑥任限又みちたり

一五⑦白き真砂のみありて雪の積れるに似たり

一九⑧すながしといふ物をしたるににたり

二〇⑪難行苦行の二の道ともにかけたりといへども

二一①をのずから一瓢の器をかけたるといへり

二二③春の草のみ生たりといへる詩思ひいでられて

二三⑥武勇三略の名を得たり

二五⑪都良香が富士の山の記に書たり

二六④むれたる鳥おほくさはぎたり

二六⑨浮嶋となん名付たりと聞にも

二七③眺望いづくにもまさりたり

二九④暢臥房のよるのきゝにもすぎたり

三〇⑪九の世のはつえをたけき人にうけたり

三〇⑬跡をつぎて將軍のめしをえたり

三二②仏像をつくり堂舎を建たり

たる困

- 五⑧都にはいつしか引かへたるこゝちす
- 八②市の日になむあたりたるとぞいふなる
- 八⑧木立年ふりたる杜の木の間より
- 八⑨あけの玉垣色をかへたるに
- 八⑩木綿四手風にみだれたることから
- 八⑩物にふれて神さびたる中にも

九⑦ いまだいくばくならずとかきたるこそ哀に心ほそく聞ゆ  
れ

- 一〇④ 波も空もひとつにて山路につゞきたるやうに見ゆ
- 一一⑫ 原の中にあまたふみわけたる道ありて
- 一二⑬ 植をかれたる柳もいまだ陰とたのむまでは
- 一三⑪ 往還の陰までも思ひよりに植をかれたる柳なれば
- 一三⑧ 昔より住つきたる里人の
- 一四⑪ 軒ふりたるわらやのところがく
- 一四⑫ 月のかげ曇なくさし入たる折しも
- 一四⑬ すこしおとなびたるけはひにて
- 一五⑨ うちつれたる旅人のかたるをきけば
- 一六⑧ 天竜と名付たるわたりあり
- 一七③ 宿かりて一日二日とゞまりたるほど
- 一七⑥ 名残おほかりし橋本の宿にぞ相似たる
- 一九⑥ 一すぢならず流わかれたる川瀬ども
- 一九⑦ 川瀬どもとかく入ちがひたる様にて
- 一九⑦ すながしといふ物をしたるににたり
- 一九⑬ かれいゝなど取出たるに嵐冷しく梢にひゞきわたりて
- 二〇⑤ 道のほとりに札をたてたるをみれば
- 二〇⑨ さしとおもひはなれたる道心も侍らぬうへ
- 二〇⑩ 其身堪たるかたなければ理を観ずるに心くらく
- 二〇⑫ 山の中に眠れるは里にありて動たるにまされるよし
- 二一② 此庵のあたりには殊更煙たてたるよすがもみえず
- 二一③ なくさめまでも思ひたえたるさまなり

二一⑨ 歌どもあまた書付たる中に  
二三⑭ 海に向ひたる家にやどりて侍れば

- 二四⑬ をくれたる者まちつけんとしてある家に立入たるに
  - 二四⑭ をくれたる者まちつけんとしてある家に立入たるに
  - 二四⑭ 障子に物をかきたるをみれば
  - 二六③ むれたる鳥おほくきはぎたり
  - 二八② 枯たる稲葉もたちまちに緑にかへりける
  - 三〇⑨ 三浦かさきの波まより出たる月の影のさやけさ
  - 三一⑤ 二階堂はことにすぐれたる寺也
  - 三一⑩ 代々の將軍以下つくりそへられたる松の社蓬の寺
  - 三三⑪ よろこびは朱買臣にあひにたるこゝちす
- たれ 回

- 一一⑨ ほむの川原にうち出たればよもの望かすかにして
  - 一六② 御堂へ参りたれば不断香の煙風にさそはれ
  - 一六④ 紐に結びつけたれば弘誓のふかき事うみのごとし
  - 一八① よまれたれば名高き名所なりとは聞きたれども
  - 一八② 名高き名所なりとは聞きたれども
  - 一八⑫ かゝれたりけりと聞きたればいとあはれにて
  - 一九⑥ 大井川を見渡したれば遙々とひろき河原の中に
  - 二七⑥ 或家にやどりたれば網つりなどいとなむ賤しきものす
- みか

- 二九② 湯本と云所にとまりたれば太山おろしはげしく
- 三一⑬ いざなひてまいりたればたふとくありがたし

う

つ

二八⑪ 錢塘の水心寺ともいひつべし

三二⑨ これも不思議といひつべし

つる困

二四⑤ さらにまどろむ間だになかりつる草の枕

つれ

六⑨ しはしとてこそたちとまりつれとよめるも

う

一⑦ 都のほとりに住居つゝ人並に世にふる道になんつらなれり

一⑪ 雲をしのぎ霧を分つゝしばしば前途の極なきにすゝむ

二⑦ 風のかぜはげしきをわびつゝぞすぐしける

三⑩ 比叡山にて此海を望つゝよめりけん歌

三⑫ 世中を漕行舟によそへつゝなかめし跡を又そなかむる

四⑭ 昔なゝの翁のよりあひつゝ老をいとひて

七⑨ 月のかげに筆を染つゝ花洛を出て三日

一七④ あまの小舟に棹さしつゝ浦の有さま見めぐれば

一八⑧ 此山もこえつゝ猶過行ほどに菊川といふ所あり

二〇⑬ 此山に庵を結つゝあまたの年月ををくるよしをこたふ

二四⑩ 旅の空ぞかしなど打ながめられつゝいと心ほそし

三〇③ かくしつゝあかしくらすほどに

つ

一① 齡は百とせの半に近づきて鬢の霜漸冷しといへども

一⑧ 是即身は朝市にありて心は隱遁にあるいはれなり

一⑩ 都を出て東へ越く事あり

一⑪ 山かさなり江かさなりてはるく遠き旅なれども

一⑫ 終に十余の日数をへて鎌倉に下り着きし間

一⑭ 目にたつ所々心とまるふしぐをかき置て

二② 東山の辺なる住家を出て相坂の関うち過るほどに

二③ 秋ぎり立わたりてふかき夜の月かげほのかなり

二④ 木綿付鳥かすかにをとづれて

二⑥ 此関の辺にわらやの床を結びて

二⑥ 常は琵琶をひきて心をすまし

二⑦ 大和歌を詠じておもひを述けり

二⑧ 蟬丸は延喜第四の宮にておはしけるゆへに

二⑫ 東三条院石山に詣て還御ありけるに

三④ 近江の志賀の郡に都うつりありて大津の宮をつくられけり

三⑤ 此ほどはふるき皇居の跡ぞかしとおぼえてあはれなり

三⑨ 曙の空になりてせたの長橋うち渡すほどに

三⑩ 湖はるかにあらはれて

三⑪ 此海を望つゝよめりけん歌おもひ出られて

三⑭ このほどをも行過て野路と云所にいたりぬ

四⑦ 洲崎所々に入ちがひてあしかつみななどおひわたれる中に

四⑧をしかものうちむれてとびちがふさま

五①老をいとひてよみける歌の中に

五①鏡山いさたちよりてみてゆかむ

五①鏡山いさたちよりてみてゆかむ

五②此山の事にやとおぼえて宿もからまほしく覚えけれども

五③猶おくさまにとふべき所ありてうち過ぬ

五⑦とこの秋かぜ夜ふくるままに身にしてみて

五⑧枕にちかきかねの声曉の空にをとづれて

五⑩行末とをきたびの空思ひつゞけられていといたう物がな

し

五⑪都出ていくかもあらぬこよひたに

五⑬この宿をいでて笠原の野原うちとをるほどに

六⑤清水余り涼しきまですみわたりて実身にしむばかりな

り

六⑥往還の旅人多く立よりてすゞみあへり

六⑧立さらん事はものうくて更にいそがれず

六⑬かしは原と云所をたちて美濃国関山にもかゝりぬ

六⑭山風松の梢に時雨わたりて

七③秋の風とよませ給へる歌おもひ出られて

七④いやしきことの葉をのこさんも中中におぼえて愛をばむ

なしくうち過ぬ

七⑥くるせ川と云所にとまりて

七⑥夜更るほどに川端に立出てみれば

七⑦晴天清き河瀬にうつろひて照月なみも数みゆばかりすみ

渡れり

七⑧古人の心遠く思ひやられて旅のおもひいとゞをさへがた

くおぼゆれば

七⑨花洛を出て三日株瀬川に宿して一宵

七⑩株瀬川に宿して一宵

八①そこの人あつまりて里もひゞくばかりにのゝしりあへ

り

八③かのみてのみや人にかたらんとよめる花のかたみには

八④花のかたみにはやうかはりておぼゆ

八⑧やがてまいりておがみ奉るに

八⑨夕日のかげたえだえさし入てあけの玉垣色をかへたるに

八⑩みだれたることから物にふれて神さびたる中にも

八⑪雪のつもれるやうに見えて遠く白きものから

九③夷をたいらげて帰り給ふ時

九③尊は白鳥となりて去給ふ

九⑤長保のすゑにあたりて当国の守にて下りけるに

九⑤大般若を書て此宮にて供養をとげける願文に

九⑨思ひ出のなくてや人のかへらまし

九⑩有明の月かげふけて友なし千鳥ときくをとづれわたれ

る

九⑬旅の空のうれへすゞろに催して哀かたぐふかし

九⑭古郷は日をへて遠くなるみかた

一〇②二村山にかゝりて山中などをこえ過るほどに

一〇③東漸しらみて海の面はるかにあらはれわたれり

- 一〇④波も空もひとつにて山路につゞきたるやうに見ゆ  
 一〇⑦ゆきく三河国八橋のわたりをみれば  
 一〇⑨おもひ出られてそのあたりをみれども  
 一〇⑩かの草とおぼしき物はなくていねのみぞおほくみゆる  
 一一①おもひ出られてあはれなれ  
 一一②やはぎといふ所をいでてみやち山こえ過るほどに  
 一一④哀に思ひいでられて過がたし  
 一一⑩一千余里を見わたしたらんこゝちして  
 一一⑫あまたふみわけたる道ありて行末もまよひぬべきに  
 一一⑬たよりの輩に仰て植をかけたる柳も  
 一二②ひとつの甘棠のもとをしめて政をこなふ時  
 一二③つかさ人よりはじめてもろくの民にいたるまで  
 一二⑤国民挙りて其徳政を忍ぶ故に  
 一二⑥彼木を敬て致てきらず  
 一二⑩此召公の跡を追て人をはぐくみ物を憐むあまり  
 一二⑪思ひよりて植をかけたる柳なれば  
 一二⑬国の民のごとくにおしみそだてて  
 一三⑥ふるきをすててあたらしきにつくならひ  
 一三⑬谷河のながれ落て岩瀬の波ことくしくきこゆ  
 一四②きゝわたりしかひありてけしきいと心すごし  
 一四④其間に洲崎遠くさし出て松きびしく生つゞき  
 一四⑬すこしおとなびたるけはひにて  
 一五④此宿をもうち出て行過るほどに  
 一五⑥白き真砂のみありて雪の積れるに似たり  
 一五⑦其間に松たえたく生渡りて塩かせ梢に音信  
 一五⑫一とせ望むことありて鎌倉へくだる筑紫人有けり  
 一五⑭もしこの本意をとげて古郷へむかはす  
 一六①御堂をつくるべきよし心のうちに申置て侍りけり  
 一六①望むことかなひけるによりて御堂を造けるより  
 一六⑤うみのごとしといへるもたのもしくおぼえて  
 一六⑨秋の水みなぎり来て舟のさること速なれば  
 一六⑩をのづからくつがへりて底のみくづとなるたぐひ  
 一六⑫彼巫峡の水の流おもひよせられていと危き心ちすれ  
 一七③爰に宿かりて一日二日とゞまりたるほど  
 一七⑤洲崎遠くへだたりて南には極浦の波袖を湿し  
 一七⑧是も心とまらずしもあらざりましたなどはおぼえて  
 一七⑬ゆふたすきかけてそ頼む今思ふ  
 一八③北は深山にて松杉風はげしく  
 一八③南は野山にて秋の花露しげし  
 一八④谷より嶺にうつるみち雲に分入心地して  
 一八⑥踏かよふ峯の梯とたえて雲にあとゝふ佐夜の中山  
 一八⑨中御門中納言宗行と聞えし人の罪ありて東へくだられけるに  
 一八⑩昔は南陽県の菊水下流を汲て醪をのぶ  
 一八⑪今は東海道に宿して命をうしなふと  
 一八⑫いとあはれにて其家を尋るに  
 一八⑬火のためにやけてかの言のはものこらず  
 一九④菊川をわたりていくほどもなく一村の里あり

- 一九⑧中々わたりてみむよりもよそめおもしろくおぼゆれば  
 一九⑨かの紅葉みだれてながれけむ童田川ならねども  
 一九⑫まへ嶋の宿をたちて岡部のいまずくをうち過るほど  
 一九⑬かた山の松のかげに立よりてかれいるなど取出たるに  
 一九⑭風冷しく梢にひゞきわたりて  
 二〇②松の嵐に心してふけ  
 二〇③つたかえではしげりてむかしのあとたえず  
 二〇⑥みちより近きあたりなれば少打入てみるに  
 二〇⑦画像の阿弥陀仏をかけ奉て浄土の法もんなどをかけり  
 二〇⑫山の中に眠れるは里にありて勤たるにまされるよし  
 二〇⑬ある人のをしへにつきて此山に庵を結つゝ  
 二〇⑭むかし叔齋が首陽の雲に入て猶三春の蕨をとり  
 二一③身を孤山の嵐の底にやどして心を浄域の雲の外にすませ  
 二一④いはねどしるくみえて中々あはれに心にくし  
 二一⑧峠と云所にいたりて  
 二一⑩心とまりておぼゆればそのかたはらにかきつけし  
 二一⑭石をたかくつみあげてめにたつさまなる塚あり  
 二二③春の草のみ生たりといへる詩思ひいでられて  
 二二⑩さはこゝにて有けるよと哀に思ひあはせらる  
 二二⑪配所へおもむかせ給ひて  
 二二⑬西行修行のついでにみまいらせて  
 二三④清見が関も過うくてしばしやすらへば  
 二三⑤沖の石村々塩干にあらはれて波に咽び  
 二三⑤磯の塩屋ところゝ風にさそはれて煙たなびけり  
 二三⑧此関にいたりてとどまりけるが  
 二三⑨民部卿にもなひて軍監と云つかさにて行けるが  
 二四①海に向ひたる家にやどりて侍れば  
 二四②波の音も身のうへにかゝるやうにおほえて  
 二四⑧かひなき心ちしてはすまもなき袖のしづくまでは  
 二五③冬の朝簾をあげて峯の雪を望けり  
 二五④さゆる夜衣をかたしきて山の雪をおもへる  
 二五⑤かれもこれもともに心すみておぼゆ  
 二五⑥冴る夜に誰こゝにしもふしわひて高ねの雪を思ひやりけ  
 二五⑧田子の浦にうち出てふじの高ねを見れば  
 二五⑩白衣の美女二人ありて山の頂にならび舞と  
 二六①浮嶋が原はいつくよりもまさりてみゆ  
 二六①北はふじの麓にて西東へはるゝとながき沼あり  
 二六③山のみどり影を浸して空も水もひとつ也  
 二六③蘆かり小舟所々に棹さして  
 二六④南は海のおもて遠くみわたされて  
 二六⑦煙たえとく立わたりて浦かせ松の梢にむせぶ  
 二六⑧此原昔は海の上にかびて蓬萊の三の嶋のごとくに有け  
 るによりて  
 二六⑨蓬萊の三の嶋のごとくに有けるによりて浮嶋となん名付  
 たり  
 二六⑬やがて此原につきて千本の松原といふ所あり



- 二六⑭松はるかに生わたりてみどりの陰きはもなし  
 二七①沖には舟ども行ちがひて木のはのうけるやうにみゆ  
 二七⑭松の嵐木ぐらくをとづれて庭の気色も神さびわたれり  
 二八①能因入道伊予守実綱が命によりて歌よみて奉りけるに  
 二八①能因入道伊予守実綱が命によりて歌よみて奉りけるに  
 二八①あめにはかにふりて枯たる稲葉もたちまちに緑にかへり  
 ける  
 二八④せきかけし苗代水の流きて又あまくたる神その神  
 二八⑥この砌をも立出て猶ゆきすぐるほどに  
 二八⑦岩がねたかくかさなりて駒もなづむばかり也  
 二八⑧山のなかにいたりて水うみ広くたゝへり  
 二八⑨行衛しるべせさせ給へなどのりて法施奉るついでに  
 二九①深きめくみを神にまかせて  
 二九②此山もこえおりて湯本と云所にとまりたれば  
 二九③太山おろしはげしくうちしぐれて谷川みなぎりまさり  
 二九⑤思ひよられてあはれなり  
 二九⑧此宿をもたちて鎌倉につく日の夕つかた  
 二九⑧雨俄にふりてみかさもとりあへぬほど也  
 二九⑨いそぐ心にのみすゝめられて大磯江嶋もろこしが原など  
 二九⑩見とゞむるひまもなくてうち過ぬるこそ  
 二九⑬あやしの賤が庵をかりてとゞまりぬ  
 二九⑬前は道にむかひて門なし  
 三〇②旅店の都にことなるさまかはりて心すごし  
 三〇④浦々を行てみれば海上の眺望哀を催して  
 三〇⑤海上の眺望哀を催して  
 三〇⑬さりにし治承のすゑにあたりて義兵をあげて  
 三〇⑭義兵をあげて朝敵をなびかすより  
 三〇⑭恩賞しきりに隴山の跡をつぎて將軍のめしをえたり  
 三一②陪従をさだめて四季の御かぐらをこたらす  
 三一③職掌に仰て八月の放生会ををこなはる  
 三一⑥楼台の莊嚴よりはじめて林池のありとにいたるまで  
 三一⑦殊に心とまりてみゆ  
 三一⑦石殿のきびしきをきりて道場のあらたなるをひらきしよ  
 り  
 三一⑬やがていざなひてまいりたれば  
 三二①関東のたかきいやしきをすすめて仏像をつくり堂舎を建  
 たり  
 三三③鳥愁たかくあらはれて半天の雲にいり  
 三三③白毫あらたにみがきて満月の光りをかゞやかす  
 三三⑨仏法東漸の砌にあたりて  
 三三⑭文にもくらく武にもかけて  
 三三⑭帰べきほどとおもひしもむなく過行て秋より冬にもな  
 りぬ  
 三三②聞なれし虫の音もやゝよりはりはてて  
 三三③懐古のこゝろに催されて  
 三三⑦なきてや旅の空に出にし  
 三三⑨とみの事ありて都へかへるべきになりぬ  
 三三⑭すでに鎌倉をたちて都へおもむくに

て

- 五④たちよらてけふは過なん鏡山  
 八⑥徒ならてかへる家つと  
 一一⑦別路に茂りもはてゝ葛のはの  
 一二⑦かゝる山辺の住居ならては  
 一三⑫清見かた関とはしらて行人も

と

- 一①鬢の霜漸冷しといへども  
 一③いづこに住はつべしともおもひさだめありさまなれば  
 一④彼白樂天の身は浮雲に似たり首は霜ににたりと書給へる  
 二⑤むかし蟬丸といひける世捨人  
 二⑨此関のあたりを四宮河原と名付たりといへり  
 二⑨此関のあたりを四宮河原と名付たりといへり  
 二⑭けふをかきりの影そかなしきときこゆるこそ  
 二⑭いかなりける御心のうちにかと哀に心ばそけれ  
 三⑤大津の宮をつくられけりときくにも  
 三⑤此ほどはふるき皇居の跡ぞかしとおぼえてあはれなり  
 三⑭野路と云所にいたりぬ  
 四④しの原と云所をみれば  
 四⑪飛鳥の河の淵瀬にはかぎりざりけめとおぼゆ  
 四⑫行人もとまらぬ里となりしより  
 五②年へぬる身は老やしぬるといへるは

五②年へぬる身は老やしぬるといへるは

五②此山の事にやとおぼえて

五⑥むさ寺と云山寺のあたりにとまりぬ

五⑨草の庵のねざめもかくや有けむと哀なり

五⑬おいその杜と云杉むらあり

六⑨しはしとてこそたちとまりつれとよめるもかやうの所に  
 や

六⑬かしは原と云所をたちて美濃國関山にもかゝりぬ

七②萱屋の板庇年経にけりとみゆるにも

七②たゝ秋の風とよませ給へる歌おもひ出られて

七⑥くるせ川と云所にとまりて

七⑭しらざりき秋の半の今宵しもかゝる旅ねの月をみんとは

八②けふは市の日になむあたりたるとぞいふなる

八④かのみてのみや人にかたらんとよめる花のかたみには

八⑭八雲たつといへる大和言葉も是よりはじまりけり

九①其後景行天皇の御代にこの砌に跡をたれ給へりといへり

九②此宮の本体は草薙と号し奉る神剣也

九②景行の御子日本武尊と申夷をたいらげて帰り給ふ時

九③尊は白鳥となりて去給ふ

九④劔は熱田にとまり給ふともいへり

九④一条院の御時大江匡衡といふ博士有けり

九⑦古郷にかへらんとする期いまだいくばくならず

九⑦いまだいくばくならずとかかきたるこそ

一〇⑨なみだおとしける所よとおもひ出られて

- 一〇⑨かの草とおぼしき物はなくて
  - 一〇⑩花ゆへにおちし涙のかたみとや
  - 一〇⑭三河の八はしを恋しとのみや思ひわたらんと
  - 一一①恋しとのみや思ひわたらんとよめりけるこそ
  - 一一②やはぎといふ所をいでて
  - 一一②赤坂と云宿あり
  - 一一⑤あかぬ別をおしみしまよひの心をしもしるべとし
  - 一一⑩月の夜の望いかならんと床しくおぼゆ
  - 一一⑬植をかれたる柳もいまだ陰とたのむまではなけれども
  - 一一⑭かつ／＼まづ道のしるべとなれるもあはれなり
  - 一二①成王の三公として燕と云国をつかさどりき
  - 一二⑧おほくの年の風月の遊びといふ御製をたまはせたりける
- も
- 一二⑬行すゑのかげとたのまむこと
  - 一二⑬その本意はさだめてたがはじとこそおぼゆれ
  - 一三③豊河と云宿の前をうち過るに
  - 一三④わたふ津の今道と云かたに旅人おほくかゝる間
  - 一三⑦さだまれることといひながら
  - 一三⑦いかなるゆへならんとおぼつかなし
  - (一三⑩)覚東ないき豊河のかはる瀬を
  - 一三⑫参河遠江のさかひに高師の山と聞ゆるあり
  - 一三⑬境川とぞ云
  - 一四②橋本と云所に行つきぬれば
  - 一四⑤松のひゞき波のをといづれときゝわきがたし

- 一四⑥とまるたぐひ夢をさまさずといふ事なし
- 一四⑦みづうみにわたせる橋を派名となづく
- 一四⑭床の下に晴天をみると忍びやかにうち詠じたりこそ
- 一五⑤まひざはの原と云所に来にけり
- 一五⑩いつのころよりとはしらず此原に木像の観音おはします
- 一六④願書とおぼしき物計帳の紐に結びつけたれば
- 一六⑤うみのごとしといへるものもしくおぼえて
- 一六⑦深き験の有と聞にも
- 一六⑧天竜と名付たるわたりあり
- 一六⑩底のみくづとなるたぐひ多かりと聞こそ
- 一六⑩底のみくづとなるたぐひ多かりと聞こそ
- 一六⑬しづかなる流ぞかしとおもふにも
- 一七②人の心のたくひとは見す
- 一七⑩ことのまゝと聞ゆる社おはします
- 一八①古今集の歌によほりふせるとよまれたれば
- 一八②名高き名所なりとは聞きたれども
- 一八⑧此山をもこえつゝ猶過行ほどに菊川といふ所あり
- 一八⑨中御門中納言宗行と聞えし人の罪ありて東へくだられけるに
- 一八⑩菊川西岸に宿して命をうしなふとある家の柱にかゝれたりけり
- 一八⑫ある家の柱にかゝれたりけりと聞きたれば
- 一八⑬かの言のはものこらずと申ものあり
- 一九③跡は千年と誰かいひ劍

- 一九④こはまとぞいふなる  
 一九⑦すながしといふ物をしたるににたり  
 二〇④いづくなるらんと見行ほどに  
 二〇⑪難行苦行の二の道ともにかけたたりといへども  
 二二①をのづから一瓢の器をかけたたりといへり  
 二二⑧峠と云所にいたりて  
 二二⑨おほきなる卒都婆の年経にけると見ゆるに  
 二二⑩宇津の山哀もふかし萬のした道とよめる  
 二二①人たつぬれば梶原が墓となむこたふ  
 二二②道のかたはらの土と成にけりと見ゆるにも  
 二二③道のかたはらの土と成にけりと見ゆるにも  
 二二③年々に春の草のみ生たりといへる詩思ひいでられて  
 二二④ふるきつかとなりなば名だにも残らじ  
 二二④名だにも残らじとあはれ也  
 二二⑧ひとまどのびんとやおもひけむ  
 二二⑨駿河国きかはといふ所にてうたれにけりときゝしが  
 二二⑩うたれにけりときゝしが  
 二二⑩さはこゝにて有けるよと哀に思ひあはせらる  
 二二⑪かの志戸と云処にてかくれさせ御座しける御跡を  
 二二⑬なにゝかはせんとよめりけるなどうけ給はるに  
 二二⑬東路のおもひ出ともなりぬべきわたり也  
 二二⑦将門と云もの東にて謀反おこしたりけり  
 二三⑨清原滋藤といふ者  
 二三⑨軍監と云つかさにて行けるが  
 二三⑩駅路の鈴の声はよる山をすぐと云唐の歌を詠じければ  
 二三⑪民部卿泪をながしけると聞にもあはれなり  
 二三⑫清見かた関とはしらて行人も  
 二三⑭この関遠からぬほどに興津といふ浦あり  
 二四⑥寝覚ともなき晝の空に出ぬ  
 二四⑥くきが崎と云なるあら磯の岩のはさまを  
 二四⑬神原といふ宿のまへをうちとをるほどに  
 二五①旅衣すその庵のさむしろにつもるもしるきふしのしら  
 雪といふ歌なり  
 二五①山の頂にならび舞と都良香が富士の山の記に書たり  
 二五⑫いかなるゆへにかとおぼつかなし  
 二五⑭天津乙女の袖かとそみる  
 二六⑨浮嶋となん名付たりと聞にも  
 二六⑨浮嶋となん名付たりと聞にも  
 二六⑬千本の松原といふ所あり  
 二七②一葉の舟中万里身とつくれるに  
 二七⑥車返しと云里あり  
 二七⑨かくやありけむとおぼゆ  
 二七⑭伊予の国三嶋大明神をうつし奉ると聞にも  
 二八⑧箱根の湖となづく  
 二八⑨蘆の海といふもあり  
 二八⑩唐家驪山宮かとおどろかれ  
 二八⑪銭塘の水心寺ともいひつべし  
 二九⑨湯本と云所にとまりたれば

二九⑤涙もよほす滝のをとかなといへる

三〇⑩故右大將家と聞え給ふ

三〇⑭今繁昌の地となれり

三一③崇神のいつくしみ本社にかはらずと聞ゆ

三一⑦大御堂ときこゆるは

三一⑫そのほか由比の浦と云所に

三一⑭本は遠江の国の入定光上人といふものあり

三二⑥天竺震旦にもたぐひなき仏像とこそきこゆれ

三二⑧これも不思議といひつべし

三二⑨権化力をくはふるかとありがたくおほゆ

三二⑭帰べきほどとおもひしもむなしく過行て

と

一四⑨行とまる旅ねはいつもかはらねとわきて浜名の橋を過う

き

二二④いはねどしるくみえて

三三②都を急ぐ今朝なれとさすかなこりのおしき宿哉

とかや

二九⑫ながしのいりとかやいふ所に

とつて

一一①成王の三公として燕と云国をつかさどりき

とつ

二①をのづから後のかたみにもなれとてなり

二⑫関の清水を過ぎせ給ふとてよませ給ひける御歌

六⑨清水なかるゝ柳かけしはしとてこそたちとまりつれ

六⑪木陰の清水むすふとてしはしすゝまぬ旅人そなき

一七⑪その御前をすぐとていさゝかおもひつゞけられし

一八⑬今は限とてのこし置けむかたみさへあとなくなりける

二二⑬よしや君昔の玉の床とてもかゝらむのちはなにゝかはせ

ん

二四⑭をくれたる者まちつけんとてある家に立入たるに

三〇③つれづれもなぐさむやとて和賀江のつき嶋……行てみれ

ば

とも

五⑤たちよらてけふは過なん鏡山しらぬ翁のかけはみすとも

一一⑧たとひ甘棠の詠をなすとも忘るゝことなけれ

とせ

一①鬢の霜漸冷しといへどもなすことなくして

一⑩はるゝ遠き旅なれども雲をしのぎ霧を分つゝ

三②打出の浜粟津の原なんどきけどもいまだ夜のうちなれば

四⑥南山の影をひたさねども青くして澗瀧たり

五③宿もからまほしく覚えけれども猶おくさまにとふべき所

ありて

六⑧すゑ遠き道なれども立ざらん事はものうくて

一〇⑨そのあたりをみれどもかの草とおぼしき物はなくて

一一④その縁一にあらねどもあかぬ別をおししまよひの心を  
しもしるべとし一二⑭いまだ陰とたのむまではなけれどもかつくまづ道のし  
るべとなれるもあはれなり

一三⑨かの伏見の里ならねどもあれまくおしく覺ゆれ

一八②名高き名所なりとは聞きたれどもみるにいよく心ば  
そし一九⑨かの紅葉みだれてながれけむ竜田川ならねどもしばしや  
すらはる

二〇⑫ともにかけてりといへども山の中に眠れるは

二二⑤羊太傳が跡にはあらねども心ある旅人はこゝにもなみだ  
をやおとすらむ

二三①申をよばねどもさしあたりてみるにはいと哀におぼゆ

二五⑧時わかぬゆきなれどもなべていまだ白砂にはあらず

三三⑧金銅木像のかはりめこそあれども末代にとりてはこれも  
不思議と

三三⑬心とまらずしもはなけれども文にもくらく武にもかけて

三三⑬もよりのぞむ処にあらねども故郷にかへるよるこびは  
cf. しかはあれ一

な

六②かはらしな我もとゆひに置籍も名にしおいその杜の下草

一六⑥たのもしな入江に立るみをつくし深き験の有と聞にも

ながら

一三⑦さだまれることといひながらいかなるゆへならんと

一五④なごりおほくおぼえながら此宿をもうち出て

なご

四⑦あしかつみなどおひわたれる中に

四⑩家居もまばらに成行など聞こそ

七⑪雲にをくるなどある家の障子に書つくる

一〇②山中などをこえ過るほどに

一三⑥家居をさへ外にのみうつすなどぞいふなる

一五⑧漁人釣客などの栖にやあるらん

一五⑪御堂など朽あれにけるにや

一六⑩ふねなどもをのづからくつがへりて

一七⑦是も心とまらずしもあらざらましなどはおぼえて

一九⑬かれいゐなど取出たるに

二〇⑧浄土の法もんなどをかけり

二二⑭なにゝかはせんとよめりけるなどうけ給はるに

二四⑨かけてもおもはざりし旅の空ぞかしなど打ながめられつ

- 二七⑥ 網つりなどいとなむ賤しきものすみかにや
- 二八⑦ うき身の行衛しるべせさせ給へなどのりて
- 二九⑩ 大磯江嶋もろこしが原など聞ゆる所々
- 三〇④ 三浦のみさきなどいふ浦々を行てみれば

なむ (係助詞)

- 一⑦ 人並に世にふる道になんつらなれり
- 八② けふは市の日になむあたりたるとぞいふなる
- 一一⑥ うたをなんつくりけり
- 一二① 人にたづぬれば梶原が墓となむこたふ
- 二六⑨ 浮嶋となん名付たりと聞にも

なり (断定)

なら困

- 八⑤ 花ならぬ色香もしらぬ市人の徒ならてかへる家つと
- 一三⑦ いかなるゆへならんとおぼつかなし
- 一三⑨ かの伏見の里ならねども
- 一九⑥ 一すじならず流わかれたる川瀬ども
- 一九⑨ 紅葉みだれてながれけむ竜田川ならねども
- 二一⑦ 世をいとふ心のおくや濁らましかゝる山辺の住居ならて
- は
- 二九⑥ 夫ならぬたのみはなきを古郷の夢路ゆるさぬ滝の音哉
- なり 困
- 一〇⑥ 玉くしけ二村山のほのく〜と明行末は波路なりけり

に 困

- 一② 徒にあかしくらすのみにあらず
- 二⑧ 蟬丸は延喜第四の宮にておはしけるゆへに
- 二⑭ いかなりける御心のうちにかと哀に心ほそけれ
- 五② 此山の事にやとおぼえて
- 六⑩ たちとまりつれとよめるもかやうの所にや
- 一〇③ 波も空もひとつにて山路につゞきたるやうに見ゆ
- 一一④ 人の発心する道その縁にあらねども
- 一二⑨ 此こゝろにや有けん
- 一五⑧ 漁人釣客などの栖にやあるらん
- 一五⑩ 御堂など朽あれにけるにや
- 一八③ 北は深山にて松杉嵐はげしく
- 一八③ 南は野山にて秋の花露しげし
- 二二④ 羊太傳が跡にはあらねども
- 二二⑦ いかなることにかありけん
- 二二⑩ さはここにありけるよ
- 二五② たび人のしわざにやあるらん
- 二五⑨ なべていまだ白砂にはあらず
- 二五⑩ いかなるゆへにかとおぼつかなし
- 二六① 北はふじの麓にて西東へはる〜とながき沼あり
- 二六⑨ 神仙のすみかにもやあらん
- 二七⑦ 賤しきものすみかにや
- 三三⑩ のぞむ処にあらねども

なり 困

- 一〇心は隠遁にあるいはれなり  
 二一後のかたみにもなれとてなり  
 六五実身にしむばかりなり  
 七一こえはてぬれば不破の関屋なり  
 八〇此宮は素盞烏尊なり  
 九二草薙と号し奉る神劍也  
 一二一召公奭は周の武王の弟也  
 一四七ふるき名所也  
 一六四世にふる道のけはしき習ひ也  
 一八二名高き名所なりとは聞きたれども  
 二〇九わが身はもと此国のものなり  
 二二一思ひたえたるさまなり  
 二二三おもひ出ともなりぬべきわたり也  
 二五五ふしのしら雪といふ歌なり  
 二六三空も水もひとつ也  
 二六五煙の浪いとふかきながめなり  
 二七〇床のさむしろもかけるばかりなり  
 二七八駒もなづむばかり也  
 二九〇みかさもとあへぬほど也  
 三一一二階堂はことにすぐれたる寺也  
 三二六金銅十丈余の盧舎那仏なり  
 なる困
- 二二東山の辺なる住家を出て  
 四三車路の野ちの朝露けふやさは袂にかゝるはしめ成覽
- 一七四ゆふたすきかけてそ頼む今思ふことのまゝなる神のしるしを  
 一九四夏のまゝなる旅ごころも  
 二〇一是そこのたのむの木のもと岡へなる松の嵐に心してふけ  
 二〇四ことづてしけん程はいづくなるらん  
 二二一めにたつさまなる塚あり  
 なれ
- 一〇おもひさだめぬありさまなれば  
 一七思ひやすらふ程なれば  
 一〇はるゝ遠き旅なれども雲をしのぎ  
 二三駒引わたる望月の比も漸近き空なれば  
 三三いまだ夜のうちなればさだかにも見わからず  
 六一はかなく移る月日なれば遠からずおぼゆ  
 六六余熱いまだつきざる程なれば  
 六七すゑ遠き道なれども立さらん事はものうくて  
 二二植をかれたる柳なれば  
 一五すゑ遠き野原なればつくゝとながめゆくほどに  
 二〇みちより近きあたりなれば少打入てみるに  
 二四草の枕のまるぶしなれば寢覚ともなき曉の空に出ぬ  
 二五時わかぬゆきなれどもなべていまだ白妙にはあらず  
 二八あらん神の御なごりなれば  
 二八かぎりある道なればこの砌をも立出て  
 二八うれしき便なればうき身の行衛するべさせ給へ  
 三二阿弥陀は八丈の御長なれば



三二⑬ かずならぬ身なれば

三四② 都を急ぐ今朝なれとさすかなこりのおしき宿哉

cf. いくばくならず・ころろならず・しかのみならず

なり (伝聞・推定)

なる 聞

八③ 市の日になむあたりたるとぞいふなる

一三⑥ 外にのみうつすなどぞいふなる

一六② 人多くまいるなんどぞいふなる

一九④ こはまとぞいふなる

二四⑥ くきが崎と云なるあら磯の岩のはごまを

なんど

三二② 打出の浜粟津の原なんどきけども

一六② 人多くまいるなんどぞいふなる

に

一① 齢は百とせの半に近づきて鬢の霜漸冷しといへども

一② いづこに住みはつべしともおもひさだめありさまなれば

ば

一③ 彼白楽天の身は浮雲に似たり首は霜ににたりと書給へる

一④ 首は霜ににたりと書給へる

一⑦ 都のほとりに住居つゝ人竝に世にふる道に

一⑦ 人竝に世にふる道になんつらなれり

一⑦ 人竝に世にふる道になんつらなれり

一⑧ 是即身は朝市にありて心は隠遁にあるいはれなり

一⑧ 是即身は朝市にありて心は隠遁にあるいはれなり

一⑨ かゝるほどにおもはぬ外に仁治三年の秋八月十日

一⑬ しばしば前途の極なきにすゝむ

一⑭ 終に十余の日数をへて鎌倉に下り着きし間

一⑮ 或は海辺水流の幽なる砌にいたるごとに

一⑭ 砌にいたるごとに目にたつ所々心とまるふしとくを

一⑭ 目にたつ所々心とまるふしとくを

一① をのづから後のかたみにもなれとてなり

二② うち過るほどに駒引わたる望月の比も漸近き空なれば

二④ 遊子猶残月に行けん函谷の有様おもひいでらる

二⑥ 此関の辺にわらやの床を結びて

二⑧ おはしけるゆへに此関のあたりを四宮河原と名付たり

二⑫ 東三条院石山に詣て還御ありけるに

二⑫ 還御ありけるに関の清水を過ぎせ給ふとて

二⑬ ゆきあふ坂の関水にけふをかきりの影そかなしき

三④ 近江の志賀の郡に都うつりありて

三⑤ つくられけりとときにも此ほどはふるき皇居の跡ぞかし

三⑨ 曙の空になりてせたの長橋うち渡すほどに

三⑨ せたの長橋うち渡すほどに湖はるかにあらはれて

三⑫ 世中を漕行舟によそへつゝ

三⑭ このほどをも行過て野路と云所にいたりぬ

- 四③袂にかゝるはしめ成覽  
 四④北には里人住家をしめ南には池のおもて遠く  
 四⑤南には池のおもて遠く見えわたる  
 四⑥波の色もひとつになり  
 四⑦洲崎所々に入ちがひてあしかつみなどおひわたれる  
 四⑧おひわたれる中にをしかもうちむれて  
 四⑨この宿にこそとまりけるが  
 四⑩飛鳥の河の淵瀬にはかぎりざりけめとおぼゆ  
 四⑭鏡の宿にいたりぬれば  
 五①よみける歌の中に鏡山いさたちよりてみてゆかむ……と  
 いへる  
 五③猶おくぞまにとふべき所ありてうち過ぬ  
 五⑥ゆき暮ぬればむさ寺と云山寺のあたりにとまりぬ  
 五⑦夜ふくるままに身にしみて都にはいつしか引かへたる  
 五⑦都にはいつしか引かへたるこゝちす  
 五⑧枕にちかきかねの声曉の空にをとづれて  
 五⑧枕にちかきかねの声曉の空にをとづれて  
 五⑩野原うちとをるほどにおいその杜と云杉むらあり  
 五⑭下くさふかき朝つゆの霜にかはらん行すゑも  
 六②かはらしな我もとゆひに置霜も名にしおいその杜の下草  
 六③名にしおいその杜の下草  
 六④音にきゝささが井を見れば  
 六⑤実にしむばかりなり  
 六⑦秋風にかくて暫忘れぬればすゑ遠き道なれども

- 六⑨道のへに清水なかるゝ柳かけしはしとてこそ  
 六⑬かしは原と云所をたちて美濃国関山にもかゝりぬ  
 六⑬谷川霧の底に音信山風松の梢に時雨わたりて  
 六⑭山風松の梢に時雨わたりて月影もみえぬ木の下道  
 七②みゆるにも後京極撰政殿の荒にしのちはたゝ秋の風  
 七⑥くるぜ川と云所にとまりて夜更るほどに川端に  
 七⑥夜更るほどに川端に立出てみれば  
 七⑥川端に立出てみれば秋の最中の晴天清き河瀬に  
 七⑦清き河瀬にうつろひて照月なみも数みゆばかり  
 七⑨月のかげに筆を染つゝ花浴を出て三日  
 七⑩株瀬川に宿して一宵しばゝ幽吟を中秋三五夜の月に  
 七⑩しばゝ幽吟を中秋三五夜の月にいたましめ  
 七⑩かつゝ遠情を先途一千里の雲にをくるなど  
 七⑫ある家の障子に書つくるついでに  
 七⑫ある家の障子に書つくるついでに  
 八②里もひゞくばかりにのゝしりあへり  
 八②けふは市の日になむあたりたるとぞいふなる  
 八③往還のたぐひ手毎にむなしからぬ家づとも  
 八④人にかたらんとよめる花のかたみに  
 八④花のかたみにはやうかはりておぼゆ  
 八⑦尾張国熱田の宮にいたりぬ  
 八⑧おがみ奉るに木立年ふりたる杜の木の間より  
 八⑨色をかへたるに木綿四手風にみだれたることから  
 八⑨木綿四手風にみだれたることから

- 八⑩物にふれて神さびたる中にもねぐらあらそふ驚むらの  
 八⑩神さびたる中にもねぐらあらそふ驚むらのかずも  
 八⑩梢にきるるさま雪のつもれるやうに見えて  
 八⑬はじめは出雲国に宮造ありけり  
 九①景行天皇の御代にこの砌に跡をたれ給へりといへり  
 九①この砌に跡をたれ給へりといへり  
 九③劍は熱田にとまり給ふともいへり  
 九⑤長保のすゑにあたりて当国の守にて下りけるに  
 九⑤守にて下りけるに大般若を書て此宮にて供養を  
 九⑥供養をとげける願文に吾願已にみちぬ  
 九⑥古郷にかへらんとする期いまだいくばくならずと  
 九⑩浜路におもむくほど有明の月かげふけて  
 一〇②やがて夜のうちに二村山にかゝりて  
 一〇②やがて夜のうちに二村山にかゝりて  
 一〇②こえ過るほどに東漸しらみて海の面はるかに  
 一〇④山路につゞきたるやうに見ゆ  
 一〇⑧歌よみたりけるにみな人かかれいるのうへに  
 一〇⑧かかれいるのうへになみだおとしける所よと  
 一〇⑩花ゆへにおちし涙のかたみとや  
 一〇⑬とまりける女のもとにつかはしける歌に  
 一〇⑭つかはしける歌にもろともゆかぬ三河の八はしを  
 一一②みやち山こえ過るほどに赤坂と云宿あり  
 一一③こゝにありける女ゆへに大江定基が家を出けるも  
 一一③こゝにありける女ゆへに大江定基が家を出けるも
- 一一⑤誠の道におもむきけんありがたくおほゆ  
 一一⑦別路に茂りもはてゝ葛のはの  
 一一⑧いかてかあらぬかたに返し  
 一一⑨ほむの川原にうち出たればよもの望かすかにして  
 一一⑩茂れるさゝ原の中にあまたふみわけたる道ありて  
 一一⑫行末もまよひぬべきに古武蔵の前司道のたよりの輩に  
 一一⑬古武蔵の前司道のたよりの輩に仰て植をかれたる柳も  
 一二③もろゝの民にいたるまでそのもとをうしなはず  
 一二⑤其徳政を忍ぶ故に召公去にし跡までも  
 一二⑦東宮にておはしましけるに学士実政任国に赴く時  
 一二⑦学士実政任国に赴く時  
 一三③豊河と云宿の前をうち過るにある者のいふをきけば  
 一三④よくるかたなかりし程に近比より俄にわたふ津の  
 一三⑤今道と云かたに旅人おほくかゝる間  
 一三⑤人の家居をさへ外にのみうつすなどぞいふなる  
 一三⑥ふるきをすててあたらしきにつくならひ  
 一三⑯参河遠江のさかひに高師の山と聞ゆるあり  
 一三⑯山中にこえかゝるほどに谷河のながれ落て  
 一四①音もたかしの山にきにけり  
 一四②橋本と云所に行つきぬればきゝわたりしかひありて  
 一四③南には潮海あり漁舟波にうかぶ  
 一四③漁舟波にうかぶ北には湖水有  
 一四③北には湖水有人家岸につらなれり

- 一四④ 人家岸につらなれり  
 一四④ 其間に洲崎遠くさし出て松きびしく生つゞき  
 一四⑦ みづうみにわたせる橋を浜名となづく  
 一四⑪ さても此宿に一夜とまりたりしやどあり  
 一四⑬ 君どもあまたみえし中にすこしおとなびたるけはひ  
 一四⑭ 床の下に晴天をみると忍びやかにうち詠じたりしこそ  
 一五③ 月のかつらの色にみえにき  
 一五④ 行過るほどにまひざはの原と云所に来にけり  
 一五⑤ まひざはの原と云所に来にけり  
 一五⑦ 白き真砂のみありて雪の積れるに似たり  
 一五⑦ 其間に松たえくゝ生渡りて塩かぜ梢に音信  
 一五⑦ 塩かぜ梢に音信又あやしの草の庵所々みゆる  
 一五⑨ ながめゆくほどにうちつれたる旅人のかたるをきけば  
 一五⑩ いつのころよりとはしらず此原に木像の観音おはします  
 一五⑫ 草の庵のうちに雨露もたまらず年月を送るほどに  
 一五⑫ 年月を送るほどに一とせ望むことありて鎌倉へくだる  
 一五⑬ 此観音の御前にまいりたりけるが  
 一五⑭ 御堂をつくるべきよし心のうちに申置て侍りけり  
 一六① 望むことかなひけるによりて御堂を造けるより  
 一六③ 不断香の煙風にさそはれうちかほり  
 一六④ 願書とおほしき物計帳の紐に結びつけたれば  
 一六⑥ たのもしな入江に立るみをつくし  
 一六⑦ 深き験の有と聞にも  
 一六⑩ 往還の旅人たやすくむかひの岸につきがたし
- 一六⑫ 人の心にくらふればしづかなる流ぞかしとおもふにも  
 一六⑬ 流ぞかしとおもふにもたとふべきかたなきは  
 一六⑭ たとふべきかたなきは世にふる道のけはしき習ひ也  
 一七③ 遠江の国府いまの浦につきぬ  
 一七③ 爰に宿かりて一日二日とゞまりたるほど  
 一七④ あまの小舟に棹さしつゝ浦の有さま見めぐれば  
 一七⑤ しほ海湖の間に洲崎遠くへだたりて  
 一七⑤ 南には極浦の波袖を湿し北には長松の嵐心を  
 一七⑤ 北には長松の嵐心をいたましむ  
 一七⑥ 名残おほかりし橋本の宿にぞ相似たる  
 一七⑨ 浪の音も松の嵐もいまの浦に昨日の里の名残をぞきく  
 一八① 古今集の歌によこほりふせるとよまれたれば  
 一八② 聞をきたれどもみるにいよく心ばそし  
 一八④ 谷より嶺にうつるみち  
 一八④ 雲に分入心地して鹿の音なみだをもよほし  
 一八⑦ 雲にあとゝふ佐夜の中山  
 一八⑧ 此山をもこえつゝ猶過行ほどに菊川といふ所あり  
 一八⑩ 東へくだられけるに此宿にとまりけるが  
 一八⑩ 東へくだられけるに此宿にとまりけるが  
 一八⑪ 今は東海道の菊川西岸に宿して命をうしなふと  
 一八⑪ ある家の柱にかゝれたりけりと聞きたれば  
 一八⑫ 其家を尋るに火のためにやけて  
 一八⑬ 火のためにやけてかの言のはものこらずと申ものあり  
 一九⑤ ひがしのはてにすこしうちのぼるやうなる奥より

- 一九⑥河原の中に一すぢならず流わかれたる川瀬ども  
 一九⑧すながしといふ物をしたるににたり  
 一九⑬松のかげに立よりてかれないるなど取出たるに  
 一九⑬かれいるなど取出たるに嵐冷しく梢にひゞきわたりて  
 一九⑬嵐冷しく梢にひゞきわたりて  
 二〇②松の嵐に心してふけ  
 二〇④す行者にことづてしけん程はいづくなるらんと  
 二〇⑤見行ほどに道のほとりに札をたてたるをみれば  
 二〇⑤道のほとりに札をたてたるをみれば  
 二〇⑥少打入てみるにわづかなる草の庵のうちに独の僧あり  
 二〇⑦わづかなる草の庵のうちに独の僧あり  
 二〇⑧其外にさらにみゆる物なし  
 二〇⑩理を観ずるに心くらく仏を念ずるに性ものうし  
 二〇⑪理を観ずるに心くらく仏を念ずるに性ものうし  
 二〇⑫山の中に眠れるは里にありて勤たるにまされるよし  
 二〇⑫里にありて勤たるにまされるよし  
 二〇⑫里にありて勤たるにまされるよし  
 二〇⑬ある人のをしへにつきて此山に庵を結つゝ  
 二〇⑬此山に庵を結つゝあまたの年月ををくるよしをこたふ  
 二〇⑭首陽の雲に入て猶三春の蕨をとり  
 二一①潁水の月にすみしをのづから一瓢の器をかけたりと  
 二一②此庵のあたりには殊更煙たてたるよすがもみえず  
 二一③身を孤山の嵐の底にやどして心を浄域の雲の外に  
 二一④心を浄域の雲の外にすませる  
 二一⑧峠と云所にいたりておほきなる卒都婆の年経にけると  
 二一⑨年経にけると見ゆるに歌どもあまた書付たる中に  
 二一⑨書付たる中に東路はこゝをせにせん宇津の山  
 二一⑩東路はこゝをせにせん宇津の山京もふかし薦のした道  
 二一⑪そのかたばらにかきつけし  
 二一⑫我も又こゝをせにせんうつの山  
 二一⑭猶うちすぐるほどにある木陰に石をたかくつみあげて  
 二一⑭ある木陰に石をたかくつみあげて  
 二一⑭めにたつさまなる塚あり  
 二二①人にたづぬれば梶原が墓となむこたふ  
 二二②土と成にけりと見ゆるにも……草のみ生たりといへる詩  
 思ひいでられ  
 二二⑤心ある旅人はこゝにもなみだをやおとすらむ  
 二二⑥將軍二代の恩に懦り武勇三略の名を得たり  
 二二⑥かたはらに人なくぞみえける  
 二二⑧たちまちに身をほるぼすべきになりければ  
 二二⑨はせのぼりけるほどに駿河国きかはといふ所にて  
 二二⑫西行修行のついでにみまいらせて  
 二二⑬かゝらむのちはなにゝかはせんとよめりけるなど  
 二二⑭うけ給はるにましてしもざまのものは  
 二二⑭しもざまのものは申にをよばねども  
 二三①さしあたりてみるにはいと哀におほゆ  
 二三②あはれにも空にうかれし玉粹の  
 二三③道のへにしも名をとゞめけり

- 二三④沖の石村々塩干にあらはれて波に咽び  
 二三⑤波に咽び磯の塩屋ところ々風にさそはれて  
 二三⑥磯の塩屋ところ々風にさそはれて煙たなびけり  
 二三⑦是をたひらげんために民部卿忠文をつかはしける  
 二三⑧此関にいたりてとどまりけるが  
 二三⑨民部卿にともなひて軍監と云つかさにて行けるが  
 二三⑩民部卿泊をながしけると聞にもあはれなり  
 二三⑪この関遠からぬほどに興津といふ浦あり  
 二三⑫海に向ひたる家にとどりて侍れば  
 二三⑬海に向ひたる家にとどりて侍れば  
 二四①いそべによする波の音も身のうへにかゝるやうに  
 二四②身のうへにかゝるやうにおぼえて  
 二四③清見かた磯へに近きたひ枕  
 二四④かけぬ浪にも袖はぬれけり  
 二四⑤寝覚ともなき暁の空に出ぬ  
 二四⑥行過るほどに沖津風はげしきうちよする波も  
 二四⑦沖津風はげしきうちよする波もひまなければ  
 二四⑧うちとをるほどにをくれたる者まちつけんとて  
 二四⑨をくれたる者まちつけんとてある家に立入たるに  
 二四⑩ある家に立入たるに障子に物をかきたるをみれば  
 二四⑪障子に物をかきたるをみれば  
 二五①庵のさむしろにつもるもしるきふしのしら雪  
 二五②昔香爐峯の麓に庵をしむる隠士あり  
 二五③今富士の山のあたりに宿をかる行客あり  
 二五④訝る夜に誰こゝにしもふしわひて  
 二五⑤訝る夜に誰こゝにしもふしわひて  
 二五⑥田子の浦にうち出てふじの高ねを見れば  
 二五⑦青して天によれるすがた絵の山よりもこよなうみゆ  
 二五⑧山の頂にならび舞と都良香が富士の山の記に書たり  
 二五⑨都良香が富士の山の記に書たり  
 二五⑩ふしのねの風にたよふ白雲を  
 二六①蘆かり小舟所々に棹さして  
 二六②すべて孤嶋の眼に遮るをのぞむ  
 二六③速帆の空につらなれるをのぞむ  
 二六④原には塩屋の煙たえぐ立わたりて  
 二六⑤浦かぜ松の梢にむせぶ  
 二六⑥海の上にかびて蓬萊の三つ嶋のごとくに有けるに  
 二六⑦有けるによりて浮嶋となん名付たりと聞にも  
 二六⑧名付たりと聞にもをのづから神仙のすみかにもや  
 二六⑨影ひたす沼の入えにふしのねの  
 二六⑩やがて此原につきて千本の松原といふ所あり  
 二六⑪沖には舟ども行ちがひて木のはのうけるやうにみゆ  
 二六⑫一葉の舟中万里身とつくれるに彼も是もはづれず  
 二七①眺望いづくにもまさりたり  
 二七②みとりにつゝ波のうへ哉  
 二七③或家にやどりたれば  
 二七④いとふありかや袖にのこらん  
 二七⑤伊豆の国府にいたりぬれば

- 二七⑫うちおがみ奉るに松の風木ぐらくをとづれて  
 二七⑭うつし奉ると間にも能因入道伊予守実綱が命によりて  
 二八①実綱が命によりて歌よみて奉りけるに  
 二八①歌よみて奉りけるに炎早の天よりあめにはかにふりて  
 二八②緑にかへりけるあら人神の御なごりなれば  
 二八⑥猶ゆきすぐるほどに宮根の山にもつきにけり  
 二八⑦宮根の山にもつきにけり  
 二八⑧山のなかにいたりて水うみ広くたゝへり  
 二八⑩雲にかさなれる粧ひ唐家驪山宮かとおどろかれ  
 二八⑪波にのぞめるかげ銭塘の水心寺ともいひつべし  
 二八⑬法施奉るついでに  
 二九①深きめくみを神にまかせて  
 二九②湯本と云所にとまりたれば  
 二九④暢臥房のよるのきゝにもすぎたり  
 二九④源氏物がたりの歌に涙もよほす滝のをとかなといへる  
 二九⑧此宿をもたちて鎌倉につく日の夕つかた  
 二九⑨いそぐ心にのみすゝめられて  
 二九⑫暮かゝるほどに下りつきぬれば  
 二九⑫なにがしのいりとかやいふ所にあやしの賤が庵をかりて  
 二九⑬前は道にむかひて門なし  
 二九⑭行人征馬すだれのもとにゆきちがひ  
 二九⑭うしろは山ちかくして窓にのぞむ  
 三〇①鹿の音虫の声かきのうへにいそがはし  
 三〇①旅店の都にことなるさまかはりて心すごし  
 三〇③あかしくらすほどにつれくもなぐさむやとて  
 三〇⑤こしかたに名高く面白き所々にもをとらずおぼゆ  
 三〇⑤こしかたに名高く面白き所々にもをとらずおぼゆ  
 三〇⑩九の世のはつえをたけき人にうけたり  
 三〇⑫さりにし治承のすゑにあたりて  
 三〇⑬宮館をこの所にしめ仏神をそのみぎりにあがめ奉る  
 三〇⑭仏神をそのみぎりにあがめ奉るよりこのかた  
 三〇⑭中にも鶴岡の若宮は  
 三一②職掌に仰て八月の放生会ををこなはる  
 三一③崇神のいつくしみ本社にかはらずと聞ゆ  
 三一⑤鳳の薨日にかゞやき  
 三一⑥兜の鐘霜にひゞき  
 三一⑥林池のありとにいたるまで殊に心とまりてみゆ  
 三一⑫由比の浦と云所に阿弥陀仏の大仏をつくり奉るよし  
 三一⑭おこりをたづぬるに本は遠江の国の人定光上人と  
 三二②その功すでに三か二にをよぶ  
 三二③半天の雲にいり白毫あらたにみがきて  
 三二⑤堂は又十二楼のかまへ望むにたかし  
 三二⑥天竺震旦にもたぐひなき仏像とこそきこゆれ  
 三二⑧末代にとりてはこれも不思議といひつべし  
 三二⑨仏法東漸の砌にあたりて  
 三二⑩見聞にも心とまらずしもはなけれども  
 三二⑫文にもくらく武にもかけて  
 三二⑫武にもかけてつるにすみはつべきよすがもなき

- 三二⑭秋より冬にもなりぬ  
 三三①季陵が胡にいりし三千里のみちの思ひ身にしらるる  
 三三①三千里のみちの思ひ身にしらるる心ちす  
 三三③懐古のころに催されて  
 三三④一行の雁がね空に消ゆくも哀なり  
 三三⑦なきてや旅の空に出にし  
 三三⑧かゝるほどに神無月の廿日あまりの比  
 三三⑧はからざるにとみの事ありて都へかへるべきになりぬ  
 三三⑨とみの事ありて都へかへるべきになりぬ  
 三三⑨水ぐきのおとにもかきながしがたし  
 三三⑩故郷にかへるよろこびは朱買臣にあひにたるこゝちす  
 三三⑩故郷にかへるよろこびは朱買臣にあひにたるこゝちす  
 三三⑫故郷へ帰る山ちのこからしに  
 三三⑭都へおもむくに宿の障子に書付  
 三四①宿の障子に書付  
 cf. おもはぬ外一・としどし一・とも一・まま一
- つに
- 三⑩比叡山にて此海を望つゝよめりけん歌おもひ出られて  
 九⑤長保のすゑにあたりて当国の守にて下りけるに  
 九⑤大般若を書て此宮にて供養をとげける願文に  
 一〇⑬源義種が此国のかみにてくだりける時  
 一二⑥後三条天皇東宮にておはしましけるに  
 一四⑬おとなびたるけはひにて……と忍びやかにうち詠じ

- 一六①鎌倉にて望むことかなひけるによりて  
 一九⑦入ちがひたる様にてすながしといふ物をしたるに  
 二二⑩駿河国きかはといふ所にてうたれにけりとときゝしが  
 二二⑫かの志戸と云処にてかくれさせ御座しける御跡を  
 二三⑦将門と云もの東にて謀反おこしたりけり  
 二三⑨軍監と云つかさにて行けるが

## ぬ

## な困

- 五④たちよらてけふは過なん鏡山  
 二二④ふるきつかとなりなば名だにも残らじとあはれ也  
 に困
- 七①萱屋の板庇年経にけりとみゆるにも  
 七②後京極摂政殿の荒にしのちはたゝ秋の風と  
 一二⑤召公去にし跡までも  
 一四①音もたかしの山にきにけり  
 一五③月のかつらの色にみえにき  
 一五⑤まひぎはの原と云所に来にけり  
 一五⑩御堂など朽あれにけるにや  
 一八⑭かたみさへあとなくなりけるこそ  
 二二⑨卒都婆の年経にけると見ゆるに  
 二二②土と成にけりと見ゆるにも  
 二二⑧身をほろぼすべきになりにければ  
 二二⑩うたれにけりとときゝしがはこゝにて有けるよと



二八⑦菅根の山にもつきにけり

三〇⑪さりにし治承のすゑにあたりて

三三①過にし延応の比より関東のたかきやしきをすすめて

三三⑦なきてや旅の空に出にし

ぬ

三⑭野路と云所にいたりぬ

五③猶おくぎまにとふべき所ありてうち過ぬ

五⑥むさ寺と云山寺のあたりにとまりぬ

五⑫かたしきわひぬ床の秋風

六⑬美濃国関山にもかゝりぬ

七⑤爰をばむなしくうち過ぬ

八⑦尾張国熱田の宮にいたりぬ

九⑥吾願已にみちぬ

一一⑫行末もまよひぬべきに

一七③遠江の国府いまの浦につきぬ

二三⑥東路のおもひ出ともなりぬべきわたり也

二四⑥寝覚ともなき曉の空に出ぬ

二九⑬あやしの賤が庵をかりてとゞまりぬ

三二⑭秋より冬にもなりぬ

三三⑨とみの事ありて都へかへるべきになりぬ

ぬる

五①年へぬる身は老やしぬるといへるは

五②年へぬる身は老やしぬるといへるは

二九⑩うち過ぬるこそいと心ならずおぼゆれ

ぬれ

三②関山を過ぬれば打出の浜栗津の原なんどきけども

四⑭鏡の宿にいたりぬれば昔なゝの翁のよりあひつゝ

五⑥ゆき暮ぬればむさ寺と云山寺のあたりにとまりぬ

六⑦秋風にかくて暫忘れぬればすゑ遠き道なれども

七①こえはてぬれば不破の関屋なり

一四②行つきぬればきゝわたりしかひありて

二七⑫国府にいたりぬれば三嶋の社のみしめうちおがみ

二九⑬下りつきぬればながしのいりとかやいふ所に

三四②なれぬれば都を急ぐ今朝なれと

ぬ

一①齡は百とせの半に近づきて

一①鬢の霜漸冷しといへども

一③彼白楽天の身は浮雲に似たり首は霜ににたりと書給へる

一⑤もとより金帳七葉のさかへをこのます

一⑤たゞ陶潜五柳のすみかをもとむ

一⑥しかはあれどもみやまのおくの柴の庵までも

一⑥みやまのおくの柴の庵までも

一⑦都のほとりに住居つゝ

一⑨仁治三年の秋八月十日あまりの比

一⑨仁治三年の秋八月十日あまりの比

一⑩まだしらぬ道の空山かさなり江かさなりて

- 一 ⑫しばしば前途の極なきにすゝむ
- 一 ⑬終に十余の日数をへて鎌倉に下り着きし間
- 一 ⑭或は山館野亭の夜のとまり
- 一 ⑮或は山館野亭の夜のとまり
- 一 ⑯或は海辺水流の幽なる砌にいたるごとくに
- 一 ⑰をのづから後のかたみにもなれとてなり
- 一 ⑱東山の辺なる住家を出て相坂の関うち過るほどに
- 一 ⑲駒引わたる望月の比も漸近き空なれば
- 一 ⑳ふかき夜の月かげほのかなり
- 一 ㉑遊子猶残月に行けん函谷の有様おもひいでらる
- 一 ㉒此関の辺にわらやの床を結びて
- 一 ㉓此関の辺にわらやの床を結びて
- 一 ㉔嵐のかぜはげしきをわびつゝぞすぐしける
- 一 ㉕ある人の云蟬丸は延喜第四の宮にておはしけるゆへに
- 一 ㉖此関のあたりを四宮河原と名付たりといへり
- 一 ㉗いにしへのわらやの床のあたり迄
- 一 ㉘いにしへのわらやの床のあたり迄
- 一 ㉙いにしへのわらやの床のあたり迄
- 一 ㉚いにしへのわらやの床のあたり迄
- 一 ㉛あまたゝひゆきあふ坂の関水に
- 一 ㉜けふをかきりの影そかなしき
- 一 ㉝いかなりける御心のうちにかと哀に心ばそけれ
- 一 ㉞いまだ夜のうちなればさだかにも見わからず
- 一 ㉟普天智天皇の御代
- 一 ㊱大和国飛鳥の岡本の宮より近江の志賀の郡に都うつり

- 三 ④近江の志賀の郡に都うつりありて
- 三 ⑤此ほどはふるき皇居の跡ぞかしとおぼえてあはれなり
- 三 ⑦さゝ波や大津の宮のあれしより
- 三 ⑧名のみ残れるしかのふる郷
- 三 ⑨曙の空になりてせたの長橋うち渡すほどに
- 三 ⑩漕行舟のあとのしら波誠にはかなく心ぼそし
- 三 ⑪漕行舟のあとのしら波誠にはかなく心ぼそし
- 四 ①旅衣いつしか袖のしづくところせし
- 四 ②東路の野ちの朝露けふやさは
- 四 ②東路の野ちの朝露けふやさは
- 四 ⑤南には池のおもて遠く見えわたる
- 四 ⑤むかひの汀みどりふかき松のむら立
- 四 ⑥みどりふかき松のむら立波の色もひとつになり
- 四 ⑥みどりふかき松のむら立波の色もひとつになり
- 四 ⑥南山の影をひたさねども青くして滉瀟たり
- 四 ⑧をしかもうちむれてとびちがふさま
- 四 ⑩かはりゆく世のならひ
- 四 ⑪飛鳥の河の淵瀬にはかぎらざりけめとおぼゆ
- 四 ⑭鏡の宿にいたりぬれば昔なくの翁のよりあひつゝ
- 四 ⑭昔なくの翁のよりあひつゝ老をいとひてよみける歌
- 五 ①老をいとひてよみける歌の中に
- 五 ②此山の事にやとおぼえて
- 五 ⑤しらぬ翁のかけはみすとも
- 五 ⑥むさ寺と云山寺のあたりにとまりぬ

- 五⑦まばらなるとこの秋かぜ夜ふくるままに身にしみて  
 五⑧枕にちかきかねの声曉の空にをとづれて  
 五⑨枕にちかきかねの声曉の空にをとづれて  
 五⑩かの遺愛寺の辺の草の庵のねざめも  
 五⑪かの遺愛寺の辺の草の庵のねざめも  
 五⑫草の庵のねざめもかくや有けむと哀なり  
 五⑬行末とをきたびの空思ひつゞけられて  
 五⑭かたしきわひぬ床の秋風  
 五⑮下くさふかき朝つゆの霜にかはらん行すゑも  
 六⑯名にしおいその杜の下草  
 六⑰陰くらき木のしたのいはねより流出る清水  
 六⑱往還の旅人多く立よりてすゞみあへり  
 六⑲班婕妤が団雪の扇秋風にかくて暫忘れぬれば  
 六⑳しはしとてこそたちとまりつれとよめるもかやうの所に  
 や  
 六㉑道のへの木陰の清水むすふとて  
 六㉒道のへの木陰の清水むすふとて  
 六㉓谷川霧の底に音信山風松の梢に時雨わたりて  
 六㉔山風松の梢に時雨わたりて  
 七①萱屋の板庇年経にけりとみゆるにも  
 七②後京極撰政殿の荒にしのはた、秋の風とよませ給へる  
 七③た、秋の風とよませ給へる歌おもひ出られて  
 七④秋の最中の晴天清き河瀬にうつるひて  
 七⑤秋の最中の晴天清き河瀬にうつるひて  
 七⑥秋の最中の晴天清き河瀬にうつるひて  
 七⑦秋の最中の晴天清き河瀬にうつるひて  
 七⑧二千里の外の古人の心遠く思ひやられて  
 七⑨二千里の外の古人の心遠く思ひやられて  
 七⑩二千里の外の古人の心遠く思ひやられて  
 七⑪旅のおもひいとゞをさへがたくおぼゆれば  
 七⑫月のかけに筆を染つゝ  
 七⑬しば、幽吟を中秋三五夜の月にいたましめ  
 七⑭かつ、遠情を先途一千里の雲にをくるなど  
 七⑮ある家の障子に書つくるついでに  
 七⑯しらすりき秋の半の今宵しも  
 七⑰しらすりき秋の半の今宵しも  
 七⑱しらすりき秋の半の今宵しも  
 七⑲かゝる旅ねの月をみるとは  
 八①かやつ、東宿の前を過れば  
 八②かやつ、東宿の前を過れば  
 八③かやつ、東宿の前を過れば  
 八④そこの人あつまりて里もひどくばかりにのゝしりあへ  
 り  
 八⑤けふは市の日になむあたりたるとぞいふなる  
 八⑥往還のたぐひ手毎にむなしからぬ家づとも  
 八⑦かのみてのみや人にかたらんとよめる花のかたみには  
 八⑧花ならぬ色香もしらぬ市人の徒ならてかへる家つと  
 八⑨神垣のあたりちかければ  
 八⑩木立年ふりたる杜の木の問より  
 八⑪杜の木の問より夕日のかげたえさし入て  
 八⑫あけの玉垣色をかへたるに  
 八⑬驚むらのかずもしらず梢にきあるさま

八⑩梢にきゐるさま雪のつもれるやうに見えて

八⑬ある人のいはく此宮は素盞鳥尊なり

九①其後景行天皇の御代にこの砌に跡をたれ給へり

九①又いはく此宮の本体は草薙と号し奉る神劍也

九②景行の御子日本武尊と申夷をたいらげて帰り給ふ時

九④一条院の御時大江匡衡といふ博士有けり

九④長保のすゑにあたりて当国の守にて下りけるに

九⑤長保のすゑにあたりて当国の守にて下りけるに

九⑨思ひ出のなくてや人のかへらまし

九⑨思ひ出のなくてや人のかへらまし

九⑩法の形見をたむけをかすは

九⑪有明の月かけふけて友なし千鳥ときぐをとつれわたれ

る

九⑫旅の空のうれへすゞるに催して

九⑫旅の空のうれへすゞるに催して哀かたぐふかし

一〇①いそく汐干の道そくるしき

一〇②やがて夜のうちに二村山にかゝりて

一〇③東漸しらみて海の面はるかにあらはれわたれり

一〇⑤玉くしけ二村山のはのく、と明行末は波路なりけり

一〇⑦ゆきく、三河国八橋のわたりをみれば

一〇⑦在原業平かきつばたの歌よみたりけるに

一〇⑧みな人かかれいゝのうへになみだおとしける所よ

一〇⑪花ゆへにおちし涙のかたみとや

一〇⑫稲葉の露を残しをくらん

一〇⑬源義種が此国のかみにてくだりける時

一〇⑬とまりける女のもとにつかはしける歌に

一〇⑭もろともゆかぬ三河の八はしを

一一④人の発心する道その縁一にあらねども

一一⑤あかぬ別をおしみしまよひの心をしもしるべとし

一一⑤誠の道におもむきけんありがたくおぼゆ

一一⑦葛のはのいかてかあらぬかたに返りし

一一⑦葛のはのいかてかあらぬかたに返りし

一一⑨よもの望かすかにして山なく岡なし

一一⑩秦甸の一千余里を見わたしたらんこちして

一一⑪月の夜の望いかならんと床しくおぼゆ

一一⑪月の夜の望いかならんと床しくおぼゆ

一一⑫茂れるさゝ原の中にあまたふみわけたる道ありて

一一⑫古武蔵の前司道のたよりの輩に仰て植をかけたる柳も

一一⑬古武蔵の前司道のたよりの輩に仰て植をかけたる柳も

一一⑭かつくまづ道のしるべとなれるもあはれなり

一一⑭もろこしの召公奭は周の武王の弟也

一一①もろこしの召公奭は周の武王の弟也

一一①もろこしの召公奭は周の武王の弟也

一一④成王の三公として燕と云国をつかさどりき

一一②陝のにしのかたを治し時

一一②陝のにしのかたを治し時

一一②ひとつの甘棠のものをしめて

一一②ひとつの甘棠のものをしめて政をこなふ時

- 一一③つかさ人よりはじめてもろくの民にいたるまで  
 一二④あまねく又人の患をことほりおもき罪をもなだめけり  
 一二⑦州の民はたとひ甘棠の詠をなすとも  
 一二⑦州の民はたとひ甘棠の詠をなすとも  
 一一⑧おほくの年の風月の遊びといふ御製を  
 一一⑧おほくの年の風月の遊びといふ御製を  
 一一⑧おほくの年の風月の遊びといふ御製を  
 一一⑧おほくの年の風月の遊びといふ御製を  
 一一⑩かの前の司も此召公の跡を追て人をはぐくみ  
 一一⑪道のほとりの往還の陰までも思ひよりて  
 一一⑪道のほとりの往還の陰までも思ひよりて  
 一一⑪道のほとりの往還の陰までも思ひよりて  
 一一⑪道のほとりの往還の陰までも思ひよりて  
 一一⑫国の民のごとくにおしみそだてて  
 一一⑬行す糸のかけとたのむこと  
 一一⑬植置しぬしなき跡の柳はら  
 一一③豊河と云宿の前をうち過るに  
 一一③ある者のいふをきけば  
 一一④近比より俄にわたふ津の今道と云かたに  
 一一⑤いまはその宿は人の家居をさへ外にのみうつす  
 一一⑧昔より住つきたる里人の今更あうかれんこそ  
 一一⑩覚束ないさ豊河のかはる瀬を  
 一一⑪いかなる人のわたりそめけん  
 一一⑫参河遠江のさかひに高師の山と聞ゆるあり  
 一一⑬谷河のながれ落て岩瀬の波ことごとくしくきこゆ  
 一一⑬谷河のながれ落て岩瀬の波ことごとくしくきこゆ  
 一一⑬谷河のながれ落て岩瀬の波ことごとくしくきこゆ  
 一一⑬駒うち渡す谷川の音もたかしの山にきにけり  
 一一⑤松のひゞき波のをといづれときゝわきがたし  
 一一⑤松のひゞき波のをといづれときゝわきがたし  
 一一⑤松のひゞき波のをといづれときゝわきがたし  
 一一⑦朝たつ雲の名残りづくよりも心ぼそし  
 一一⑦朝たつ雲の名残りづくよりも心ぼそし  
 一一⑦朝たつ雲の名残りづくよりも心ぼそし  
 一一⑦朝たつ雲の名残りづくよりも心ぼそし  
 一一⑪軒ふりたるわらやのところがまばらなるひまより  
 一一⑪軒ふりたるわらやのところがまばらなるひまより  
 一一⑪軒ふりたるわらやのところがまばらなるひまより  
 一一⑪軒ふりたるわらやのところがまばらなるひまより  
 一一⑫月のかげ曇なくさし入たる折しも  
 一一⑫月のかげ曇なくさし入たる折しも  
 一一⑫月のかげ曇なくさし入たる折しも  
 一一⑫月のかげ曇なくさし入たる折しも  
 一一⑭夜もすがら床の下に晴天をみると忍びやかに  
 一一⑭夜もすがら床の下に晴天をみると忍びやかに  
 一一⑭夜もすがら床の下に晴天をみると忍びやかに  
 一一⑭夜もすがら床の下に晴天をみると忍びやかに  
 一一②言のはの深き情は軒端もる  
 一一②言のはの深き情は軒端もる  
 一一②言のはの深き情は軒端もる  
 一一②言のはの深き情は軒端もる  
 一一③月のかつらの色にみえにき  
 一一③月のかつらの色にみえにき  
 一一③月のかつらの色にみえにき  
 一一③月のかつらの色にみえにき  
 一一③月のかつらの色にみえにき  
 一一⑥北南は眇々とはるかにして西は海の渚近し  
 一一⑥北南は眇々とはるかにして西は海の渚近し  
 一一⑥北南は眇々とはるかにして西は海の渚近し  
 一一⑥北南は眇々とはるかにして西は海の渚近し  
 一一⑦白き真砂のみありて雪の積れるに似たり  
 一一⑦白き真砂のみありて雪の積れるに似たり  
 一一⑦白き真砂のみありて雪の積れるに似たり  
 一一⑦白き真砂のみありて雪の積れるに似たり  
 一一⑧塩かせ梢に音信又あやし草の庵所々みゆる  
 一一⑧塩かせ梢に音信又あやし草の庵所々みゆる  
 一一⑧塩かせ梢に音信又あやし草の庵所々みゆる  
 一一⑧塩かせ梢に音信又あやし草の庵所々みゆる  
 一一⑧漁人釣客などの栖にやあるらん  
 一一⑧漁人釣客などの栖にやあるらん  
 一一⑧漁人釣客などの栖にやあるらん  
 一一⑧漁人釣客などの栖にやあるらん  
 一一⑩うちつれたる旅人のかたるをきけば  
 一一⑩うちつれたる旅人のかたるをきけば  
 一一⑩うちつれたる旅人のかたるをきけば  
 一一⑩うちつれたる旅人のかたるをきけば  
 一一⑩いつのころよりとはしらず  
 一一⑩いつのころよりとはしらず  
 一一⑩いつのころよりとはしらず  
 一一⑩いつのころよりとはしらず  
 一一⑩此原に木像の観音おはします  
 一一⑩此原に木像の観音おはします  
 一一⑩此原に木像の観音おはします  
 一一⑩此原に木像の観音おはします  
 一一⑪かりそめなる草の庵のうちに雨露もたまらず  
 一一⑪かりそめなる草の庵のうちに雨露もたまらず  
 一一⑪かりそめなる草の庵のうちに雨露もたまらず  
 一一⑪かりそめなる草の庵のうちに雨露もたまらず  
 一一⑬此観音の御前にまいりたりけるが  
 一一⑬此観音の御前にまいりたりけるが  
 一一⑬此観音の御前にまいりたりけるが  
 一一⑬此観音の御前にまいりたりけるが  
 一一⑭御堂をつくるべきよし心のうちに申置て侍りけり  
 一一⑭御堂をつくるべきよし心のうちに申置て侍りけり  
 一一⑭御堂をつくるべきよし心のうちに申置て侍りけり  
 一一⑭御堂をつくるべきよし心のうちに申置て侍りけり  
 一一③あかの花も露鮮なり  
 一一③あかの花も露鮮なり  
 一一③あかの花も露鮮なり  
 一一③あかの花も露鮮なり  
 一一④願書とおぼしき物計帳の紐に結びつけたれば  
 一一④願書とおぼしき物計帳の紐に結びつけたれば  
 一一④願書とおぼしき物計帳の紐に結びつけたれば  
 一一④願書とおぼしき物計帳の紐に結びつけたれば  
 一一④願書とおぼしき物計帳の紐に結びつけたれば

- 一六④弘誓のふかき事うみのごとし  
 一六⑤弘誓のふかき事うみのごとし  
 一六⑦たのもしな入江に立るみをつくし深き験の有と聞にも  
 一六⑧秋の水みなぎり来て舟のさること速なれば  
 一六⑨舟のさること速なれば  
 一六⑨往還の旅人たやすくむかひの岸につきがたし  
 一六⑩往還の旅人たやすくむかひの岸につきがたし  
 一六⑪底のみくづとなるたぐひ多かりと聞こそ  
 一六⑪彼巫峡の水の流おもひよせられて  
 一六⑪彼巫峡の水の流おもひよせられて  
 一六⑫人の心にくらぶれば  
 一六⑭たとふべきかたなきは世にふる道のけはしき習ひ也  
 一七①此河のはやき流も世中の  
 一七①此河のはやき流も世中の人の心のたくひとは見す  
 一七②世中の人の心のたくひとは見す  
 一七②世中の人の心のたくひとは見す  
 一七③遠江の国府いまの浦につきぬ  
 一七④あまの小舟に棹さしつゝ  
 一七④浦の有さま見めぐれば  
 一七⑤しほ海湖の間に洲崎遠くへだたりて  
 一七⑤南には極浦の波袖を湿し  
 一七⑥北には長松の嵐心をいたましむ  
 一七⑦昨日のめうつりなからずは  
 一七⑨浪の音も松の嵐もいまの浦に
- 一七⑨浪の音も松の嵐もいまの浦に  
 一七⑩昨日の里の名残をそきく  
 一七⑩昨日の里の名残をそきく  
 一七⑭ことのまゝなる神のしるしを  
 一七⑭ことのまゝなる神のしるしを  
 一七⑭ことのまゝなる神のしるしを  
 一八①古今集の歌によこほりふせるとよまれたれば  
 一八③南は野山にて秋の花露しげし  
 一八④雲に分入心地して鹿の音なみだをもよほし  
 一八④虫のうらみあはれふかし  
 一八⑥踏かよふ峯の梯とたえして  
 一八⑨去にし承久三年の秋の比  
 一八⑨去にし承久三年の秋の比  
 一八⑨中御門中納言宗行と聞えし人の罪ありて東へくだられけるに此宿にとまりけるが  
 一八⑩昔は南陽県の菊水下流を汲で酔をのぶ  
 一八⑪今は東海道の菊川西岸に宿して命をうしなふ  
 一八⑪ある家の柱にかゝれたりけりと聞きたれば  
 一八⑫其家を尋るに火のためにやけて  
 一八⑭あとなくなりけるこそはかなき世のならひ  
 一九④菊川をわたりていくほどもなく一村の里あり  
 一九⑤此里のひがしのはてに  
 一九⑤此里のひがしのはてに  
 一九⑥遙々とひろき河原の中に  
 一九⑩日数ふる旅のあはれは大井河

- 一九⑫ 岡部のいまずくをうち過るほど  
 一九⑬ かた山の松のかげに立よりにて  
 一九⑭ かた山の松のかげに立よりにて  
 一九⑮ 夏のまゝなる旅ごろももうすき袂もさむくおぼゆ  
 二〇① 是そこのたのむ木のもと岡へなる  
 二〇② 松の嵐に心してふけ  
 二〇③ つたかえではしげりてむかしのあとたえず  
 二〇④ 道のほとりに札をたてたるをみれば  
 二〇⑤ 無縁の世すて人あるよしをかけり  
 二〇⑥ わづかなる草の庵のうちに  
 二〇⑦ わづかなる草の庵のうちに独の僧あり  
 二〇⑧ 画像の阿弥陀仏をかけ奉て  
 二〇⑨ 浄土の法もんなどをかけり  
 二〇⑩ 発心のはじめを尋きけば  
 二〇⑪ わが身はもと此国のものなり  
 二〇⑫ 難行苦行の二の道ともかけたりといへども  
 二〇⑬ 難行苦行の二の道ともかけたりといへども  
 二〇⑭ 難行苦行の二の道ともかけたりといへども  
 二〇⑮ 山の中に眠れるは里にありて勤たるにまされるよし  
 二〇⑯ ある人のをしへにつきて  
 二〇⑰ 庵を結つゝあまたの年月ををくるよしをこたふ  
 二〇⑱ むかし叔齋が首陽の雲に入て  
 二〇⑲ むかし叔齋が首陽の雲に入て猶三春の蕨をとり  
 二一① 許由潁水の月にすみし  
 二一② をのづから一瓢の器をかけたなりといへり
- 二二① 此庵のあたりには殊更煙たてたるよすがもみえず  
 二二② 身を孤山の嵐の底にやどして  
 二二③ 身を孤山の嵐の底にやどして  
 二二④ 心を浄域の雲の外にすませる  
 二二⑤ 心を浄域の雲の外にすませる  
 二二⑥ 世をいとふ心のおくや濁らまし  
 二二⑦ かゝる山辺の住居ならては  
 二二⑧ 此庵のあたり幾程遠からず  
 二二⑨ おほきなる卒都婆の年経にけると見ゆるに  
 二二⑩ 宇津の山哀もふかし蕩のした道とよめる  
 二二⑪ 分て色ある蕩のした露  
 二二⑫ 道のかたはらの土と成にけり  
 二二⑬ 道のかたはらの土と成にけりと見ゆるにも  
 二二⑭ 顕基中納言の口ずさみ給へりけん  
 二二⑮ 年々に春の草のみ生たりといへる詩思ひいでられて  
 二二⑯ かの梶原は將軍二代の恩に橋り  
 二二⑰ 武勇三略の名を得たり  
 二二⑱ かたへの憤ふかくして  
 二二⑲ 都のかたへはせのぼりけるほどに  
 二二⑳ 西行修行のついでにみまいらせて  
 二三① よしや君昔の玉の床とてまかゝらむのちは  
 二三② ましてしもざまのものの事は  
 二三③ しもざまのものの事は申にをよばねども  
 二三④ 沖の石村々塩干にあらはれて波に咽び

- 二三⑤磯の塩屋ところ々風にさそはれて煙たなびけり  
 二三⑥東路のおもひ出ともなりぬべきわたり也  
 二三⑦むかし朱雀天皇の御時  
 二三⑩漁舟の火のかけは寒くして  
 二三⑩漁舟の火のかけは寒くして  
 二三⑩駅路の鈴の聲はよる山をすぐと云  
 二三⑩駅路の鈴の聲はよる山をすぐと云  
 二三⑩より山をすぐと云唐の歌を詠じければ  
 二四①いそべによする波の音も  
 二四①身のうへにかゝるやうにおぼえて  
 二四⑤草の枕のまろぶしなれば  
 二四⑥寢覚ともなき暁の空に出ぬ  
 二四⑥あら磯の岩のはざまを行過るほどに  
 二四⑥あら磯の岩のはさまを行過るほどに  
 二四⑧いそぐ塩干のつたひみち  
 二四⑨はすまもなき袖のしづくまでは  
 二四⑩沖津風けさあら磯の岩つたひ  
 二四⑩神原といふ宿のまへをうちとをるほどに  
 二五①旅衣すそのの庵のさむしろに  
 二五①旅衣すそのの庵のさむしろに  
 二五①つもるもしるきふしのしら雪  
 二五②心ありけるたび人のしわざにやあるらん  
 二五②昔香爐峯の麓に庵をしむる隠士あり  
 二五③冬の朝簾をあげて峯の雪を望けり  
 二五③冬の朝簾をあげて峯の雪を望けり  
 二五③今富士の山のあたりに宿をかる行客あり  
 二五④さゆる夜衣をかたしきて山の雪をおもへる  
 二五⑦高ねの雪を思ひやりけん  
 二五⑨絵の山よりもこよなうみゆ  
 二五⑩貞観十七年の冬の比白衣の美女二人ありて  
 二五⑩貞観十七年の冬の比白衣の美女二人ありて  
 二五⑩貞観十七年の冬の比白衣の美女二人ありて  
 二五⑩白衣の美女二人ありて山の頂にならび舞  
 二五⑬ふしのねの風にたよふ白雲を  
 二五⑭天津乙女の袖かとそみる  
 二六①北はふじの麓にて西東へはる々とながき沼あり  
 二六②山のみどり影を浸して空も水もひとつ也  
 二六④南は海のおもて遠くみわたされて  
 二六④雲の波煙の浪いとふかきながめなり  
 二六④雲の波煙の浪いとふかきながめなり  
 二六⑤すべて孤嶋の眼に遮るなし  
 二六⑥わづかに遠帆の空につらなれるをのぞむ  
 二六⑥こなたかなたの眺望いづれもとりとくに心ぼそし  
 二六⑦原には塩屋の煙たえぐ立わたりて  
 二六⑦浦かぜ松の梢にむせぶ  
 二六⑧此原昔は海の上にかびて蓬萊の三の嶋のごとくに  
 二六⑧蓬萊の三の嶋のごとくに有けるによりて  
 二六⑧蓬萊の三の嶋のごとくに有けるによりて



- 二六⑨をのづから神仙のすみかにもやあらん  
 二六⑩影ひたす沼の入えにふしのねの  
 二六⑪影ひたす沼の入えにふしのねの  
 二六⑬海の渚遠からず松はるかに生わたりて  
 二六⑭みどりの陰きはもなし  
 二七①木のはのうけるやうにみゆ  
 二七④見渡せば千本の松の末遠み  
 二七④見渡せば千本の松の末遠み  
 二七⑤みとりにつゝ波のうへ哉  
 二七⑦賤しきものすみかになや  
 二七⑦夜のやどりありかことにして  
 二七⑦床のさむしろもかけるばかりなり  
 二七⑧かの縛戎人の夜半の旅ねも  
 二七⑧かの縛戎人の夜半の旅ねも  
 二七⑩是そこのつりする海士の笛庇  
 二七⑫伊豆の国府にいたりぬれば  
 二七⑫三嶋の社のみしめうちおがみ奉るに  
 二七⑬松の嵐木ぐらくをとづれて  
 二七⑬庭の気色も神さびわたれり  
 二八①炎早の天よりあめにはかにふりて  
 二八②緑にかへりけるあら人神の御なごりなれば  
 二八④せきかけし苗代水の流きて  
 二八⑧山のなかにいたりて水うみ広くたへり  
 二八⑧箱根の湖となづく又蘆の海といふもあり
- 二八⑨権現垂跡のもとるけだかくたふとし  
 二八⑩朱楼紫殿の雲にかさなれる粧ひ  
 二八⑪巖室石龕の波にのぞめるかげ  
 二八⑪錢塘の水心寺ともいひつべし  
 二八⑫うき身の行衛しるべさせ給へなどのりて  
 二八⑭今よりは思ひ乱し蘆の海の  
 二九③谷川みなぎりまさり岩瀬の波高くむせぶ  
 二九④暢臥房のよるのきゝにもすぎたり  
 二九④源氏物がたりの歌に涙もよほす滝のをとかな  
 二九⑤涙もよほす滝のをとかなといへる  
 二九⑥夫ならぬたのみはなきを古郷の夢路ゆるさぬ滝の音哉  
 二九⑦夢路ゆるさぬ滝の音哉  
 二九⑧此宿をもたちて鎌倉につく日の夕つかた  
 二九⑨なにがしのいりとかやいふ所に  
 二九⑩あやしの賤が庵をかりてとまりぬ  
 二九⑭行人征馬すだれのもとにゆきちがひ  
 三〇①鹿の音虫の声かきのうへにいそがはし  
 三〇①鹿の音虫の声かきのうへにいそがはし  
 三〇①鹿の音虫の声かきのうへにいそがはし  
 三〇①鹿の音虫の声かきのうへにいそがはし  
 三〇①旅店の都にことなるさまかはりて心すごし  
 三〇④和賀江のつき嶋三浦のみさきなど  
 三〇④三浦のみさきなどいふ浦々を行てみれば  
 三〇④海上の眺望哀を催して  
 三〇⑥さひしさは過こしかたの浦々も

- 三〇⑦ひとつなかめの沖のつり舟  
 三〇⑦ひとつなかめの沖のつり舟  
 三〇⑧玉よする三浦かさきの波まより  
 三〇⑨出たる月の影のさやけさ  
 三〇⑨出たる月の影のさやけさ  
 三〇⑩抑かまくらのはじめを申せば  
 三〇⑩水の尾の御門の九の世のはつえを  
 三〇⑪水の尾の御門の九の世のはつえをたけき人にうけたり  
 三〇⑫さりにし治承のすゑにあたりて  
 三〇⑬恩賞しきりに隴山の跡をつぎて  
 三〇⑬將軍のめしをえたり  
 三〇⑭今繁昌の地となれり  
 三一①中にも鶴岡の若宮は  
 三一①松柏のみどりいよ／＼しげく  
 三一①蘋蘩のそなへかくることなし  
 三一②陪従をさだめて四季の御かぐらをこたらず  
 三一③職掌に仰て八月の放生会ををこなはる  
 三一③崇神のいつくしみ本社にかはらずと聞ゆ  
 三一④鳳の葦日にかぐやき  
 三一⑤兜の鐘霜にひゞき  
 三一⑥楼台の莊嚴よりはじめて  
 三一⑥林池のありとにいたるまで  
 三一⑦石巖のきびしきをきりて  
 三一⑧道場のあらたなるをひらきしより
- 三一⑨風とこしなへに金髻のひゞきをさそふ  
 三一⑩代々の將軍以下つくりそへられたる松の社  
 三一⑪松の社蓬の寺まぢまぢにこれおほし  
 三一⑪松の社蓬の寺まぢまぢにこれおほし  
 三一⑫阿弥陀仏の大仏をつくり奉るよし  
 三一⑭事のおこりをたづぬるに  
 三一⑭本は遠江の国の人定光上人といふものあり  
 三一①過にし延応の比より関東のたかきいやしきをすすめて  
 三一①過にし延応の比より関東のたかきいやしきをすすめて  
 三一③鳥懸たかくあらはれて半天の雲にいり  
 三一③満月の光りをかぐやかす  
 三一④仏はすなはち兩三年の功すみやかになり  
 三一④堂は又十二楼のかまへ望むにたかし  
 三一⑤彼東大寺の本尊は聖武天皇の製作  
 三一⑤彼東大寺の本尊は聖武天皇の製作  
 三一⑥金銅十丈余の盧舎那仏なり  
 三一⑦此阿弥陀は八丈の御長なれば  
 三一⑦かの大仏のなかばよりもすぐぬり  
 三一⑧金銅木像のかはりめこそあれども  
 三一⑨仏法東漸の砌にあたりて  
 三一⑩かやうのことどもを見聞にも  
 三一①蘇武が漢を別し十九年の旅の愁  
 三一①蘇武が漢を別し十九年の旅の愁  
 三一①三千里のみちの思ひ身にしらるる心ちす

- 三三① 三千里のまちの思ひ身にしらるる心ちす  
 三三② 聞なれし虫の音もやよはりはてて  
 三三③ 松ふく峯のあらしのみぞいとゞはげしくなりまされる  
 三三④ 懐古のころに催されて  
 三三⑤ つくづくと都のかたをながめやる折しも  
 三三⑥ 一行の雁がね空に消ゆくも哀なり  
 三三⑦ かへるへき春をたのむの雁かねも  
 三三⑧ なきてや旅の空に出にし  
 三三⑨ かゝるほどに神無月の廿日あまりの比  
 三三⑩ はからざるにとみの事ありて都へかへるべきになりぬ  
 三三⑪ 其ころのうち水ぐきのことにもかきながしがたし  
 三三⑫ 故郷へ帰る山ちのこからしに  
 三三⑬ おもはぬほかの錦をやきむ  
 三三⑭ 十月廿三日の暁  
 三三⑮ 宿の障子に書付  
 三四⑯ さすかなこりのおしき宿哉
- cf. あしうみ・あすかーかは・あつたーみや・あはづーは  
 ら・あふさかーせき・いちえうーふねーなかばんりーみ  
 ・いづもーくに・いよーくに・うちでーはま・うつーや  
 ま・おいそーもり・おほつーみや・かーかがみーしゅ  
 く・かさはらーのはら・かんなづきーはつかあまり・く  
 きーいほり・くさーばら・くさーまくら・くにーたみ・  
 こーこーした・こーしたみち・こーは・こーま・ここ  
 のつーよ・ことーは・ことーまま・こむさしーせんじ・

- これぞこー・さぬきーぼふうう・きよーなかやま・しが  
 ーこほり・せきーしみづ・せたーながはし・せんちゅう  
 ーまつーもとさうほうーてら・せんぼんーまつばら・そ  
 ーだいしーみや・たかしーやま・たごーうら・たびー  
 そら・たまーとこ・たまほこー・とほたふみーくに・の  
 ぢーはら・ほこねーやま・ふじーね・ふじーやまーき・  
 ふしみーさと・ふはーせきや・まひざはーはら・まへし  
 まーしゆく・みかはーくに・みしまーやしろ・みちーへ  
 ・みつーしま・みづーをーみかど・みづぐきーあと・み  
 のーくに・ゆひーうら・よーなか・よるーきき・をかも  
 とーみや・をはりーくに
- のみ
- 一② なすことなくして徒にあかしくらすのみにあらず  
 三⑧ 大津の宮のあれしより名のみ残れるしかのふる郷  
 四⑩ 今はずるたぐひのみ多くして  
 四⑬ 行人もとまらぬ里となりしより荒のみまさるのちの篠原  
 八③ かのみてのみや人にかたらん  
 一〇⑩ かの草とおぼしき物はなくていねのみぞおほくみゆる  
 一〇⑭ 恋しとのみや思ひわたらん  
 一三⑥ 人の家居をさへ外にのみうつすなどぞいふなる  
 一五⑥ 白き真砂のみありて雪の積れるに似たり  
 二二③ 年々に春の草のみ生たりといへる詩思ひいでられて  
 二九⑨ いそぐ心にのみすゝめられて

三二 ⑬ 日をふるまゝにはたゞ都のみぞこひしき  
 三三 ⑭ 松ふく峯のあらしのみぞいとゞはげしくなりまされる  
 cf. しか―ならず

は

- 一 ① 齡は百とせの半に近づきて鬢の霜漸冷しといへども
- 一 ③ 白楽天の身は浮雲に似たり首は霜ににたりと書給へる
- 一 ④ 首は霜ににたりと書給へる
- 一 ⑧ 是即身は朝市にありて心は隠遁にあるいはれなり
- 一 ⑧ 心は隠遁にあるいはれなり
- 二 ⑥ 常は琵琶をひきて心をすまし
- 二 ⑧ 蟬丸は延喜第四の宮にておはしけるゆへに
- 三 ⑤ 此ほどはふるき皇居の跡ぞかしとおぼえて
- 四 ④ 北には里人住家をしめ南には池のおもて
- 四 ⑤ 南には池のおもて遠く見えわたる
- 四 ⑨ 今はずちすぐるたぐひのみ多くして
- 四 ⑪ 飛鳥の河の淵瀬にはかざらざりけめとおぼゆ
- 五 ① 年へぬる身は老やしぬるといへるは
- 五 ② 年へぬる身は老やしぬるといへるは此山の事にや
- 五 ④ たちよらてけふは過なん鏡山
- 五 ⑤ しらぬ翁のかけはみすとも
- 五 ⑦ 都にはいつしか引かへたるこゝちす
- 六 ⑧ 立ざらん事はものうくて更にいそがれず
- 七 ② 荒にしのちはたゞ秋の風とよませ給へる

七 ③ 此うへは風情もめぐらしがたければ

七 ④ 爰をばむなしくうち過ぬ

七 ⑭ しらざりき秋の半の今宵しもかゝる旅ねの月をみるとは

八 ② けふは市の日になむあたりたるとぞいふなる

八 ④ 人にかたらんとよめる花のかたみにはやうかはりておほ

ゆ

八 ⑬ ある人のいはく此宮は素盞馬尊なり

八 ⑬ はじめは出雲国に宮造ありけり

九 ② 此宮の本体は草薙と号し奉る神剣也

九 ③ 尊は白鳥となりて去給ふ

九 ③ 剣は熱田にとまり給ふともいへり

九 ⑩ 思ひ出のなくてや人のかへらまし法の形見をたむけをか

すは

九 ⑭ 古郷は日をへて遠くなるみかた

一 ① 〇 〇 明行末は波路なりけり

一 ① 〇 〇 かの草とおぼしき物はなくて

一 ① ⑬ いまだ陰とたのむまではなけれども

一 ① ① もろこしの召公奭は周の武王の弟也

一 ① ⑦ 州の民はたとひ甘棠の詠をなすとも

一 ① ⑬ その本意はさだめてたがはじとこそおぼゆれ

一 ① ④ 此みちをば昔よりよくるかたなかりし程に

一 ① ③ いまはその宿は人の家居をさへ外にのみうつす

一 ① ③ いまはその宿は人の家居をさへ外にのみうつす

一 ① ④ 南には潮海あり漁舟波にうかぶ

- 一四③北には湖水有人家岸につらなれり  
 一四⑨行とまる旅ねはいつもかはらねと  
 一五②言のはの深き情は軒端もる  
 一五⑤北南は眇々とはるかにして  
 一五⑤北南は眇々とはるかにして西は海の渚近し  
 一五⑥錦花繡草のたぐひはいともみえず  
 一五⑩いつのころよとはしらず  
 一六④たとふべきかたなきは世にふる道のけはしき習ひ也  
 一七②人の心のたくひとは見す  
 一七⑤南には極浦の波袖を湿し北には長松の嵐  
 一七⑤北には長松の嵐心をいたましむ  
 一七⑦昨日のめうつりなからずは是も心とまらずしもあらざら  
 まし  
 一七⑦心とまらずしもあらざらましなどはおぼえて  
 一八①小夜の中山は古今集の歌によこほりふせるとよまれたれ  
 ば  
 一八②名高き名所なりとは聞きたれども  
 一八②北は深山にて松杉嵐はげしく  
 一八③南は野山にて秋の花露しげし  
 一八⑩昔は南陽県の菊水下流を汲で齡をのぶ  
 一八⑩今は東海道の菊川西岸に宿して命をうしなふと  
 一九③跡は千年と誰かいひ剣  
 一九⑩日数ふる旅のあはれは大井河  
 二〇③つたかえではしげりてむかしのあとたえず  
 二〇④行者にことづてしけん程はいつくなるらん  
 二〇⑨わが身はもと此國のものなり  
 二〇⑩山の中に眠れるは里にありて勤たるにまされるよし  
 二一②此庵のあたりには殊更煙たてたるよすがもみえず  
 二一⑦世をいとふ心のおくや濁らましかゝる山辺の住居ならて  
 ば  
 二一⑨東路はこゝをせにせん宇津の山  
 二一④羊太傳が跡にはあらねども  
 二一⑤心ある旅人はこゝにもなみだをやおとすらむ  
 二一⑥かの梶原は將軍二代の恩に僑り  
 二二⑬昔の玉の床とてもかゝらむのちはなにゝかはせん  
 二二⑬かゝらむのちはなにゝかはせん  
 二二⑭しもざまのものは申にをよばねども  
 二三①さしあたりてみるにはいと哀におぼゆ  
 二三⑩漁舟の火のかけは寒くして  
 二三⑩駅路の鈴の声はよる山をすぐ  
 二三⑫清見かた関とはしらて行人も  
 二三⑬心計はとゝめをくらむ  
 二四④かけぬ浪にも神はぬれけり  
 二四⑤こよひはさらにまどろむ間だになかりつる草の枕の  
 二四⑨ほすまもなき袖のしづくまでは  
 二五⑨なべていまだ白妙にはあらず  
 二六①浮嶋が原はいつくよりもまさりてみゆ  
 二六①北はふじの麓にて

- 二六④南は海のおもて遠くみわたされて  
 二六⑦原には塩屋の煙たえく立わたりて  
 二六⑧此原昔は海の上にかびて  
 二六⑭沖には舟ども行ちがひて  
 二七⑬此社は伊予の国三嶋大明神をうつし奉る  
 二八⑭今よりは思ひ乱し蘆の海の  
 二九⑥夫ならぬたのみはなきを古郷の  
 二九⑬前は道にむかひて門なし  
 二九⑭うしろは山ちかくして窓にのぞむ  
 三〇⑥さひしきは過こしかたの浦々も  
 三一①中にも鶴岡の若宮は松柏のみどりいよくしげく  
 三一⑤二階堂はことにすぐれたる寺也  
 三一⑦大御堂ときこゆるは石巖のきびしきをきりて  
 三一⑭本は遠江の国の人定光上人といふものあり  
 三二④仏はすなはち兩三年の功すみやかに  
 三二④堂は又十二楼のかまへ望むにたかし  
 三二⑤東大寺の本尊は聖武天皇の製作  
 三二⑦此阿弥陀は八丈の御長なれば  
 三二⑧末代にとりてはこれも不思議といひつべし  
 三二⑪心とまらずしもはなけれど  
 三二⑬日ふるまゝにはたゞ都のみぞこひしき  
 三三⑩錦をきるさかひはもとより  
 三三⑪故郷にかへるよろこびは朱買臣にあひにたるこゝちす  
 cf. さゝしかゝあれども

## ば

## I 未然形十ば

- 二①忍ぶ人もあらばをのづから後のかたみにもなれとてなり  
 一五⑭この本意をとげて古郷へむかはゞ  
 二二④ふるきつかとなりなば名だにも残らじ

## II 已然形十ば

- 一③おもひさだめぬありさまなれば  
 一⑦しばらく思ひやすらふ程なれば  
 二③望月の比も漸近き空なれば秋きり立わたりて  
 三②関山を過ぬれば打出の浜粟津の原なんどきげども  
 三③いまだ夜のうちなればさだかにも見わからず  
 四④しの原と云所をみれば西東へ遥にながき堤あり  
 四⑭鏡の宿にいたりぬれば  
 五⑥ゆき暮ぬればむき寺と云山寺のあたりにとまりぬ  
 六①はかなく移る月日なれば遠からずおぼゆ  
 六④音にきくしさが井を見れば  
 六⑥余熱いまだつきざる程なれば往還の旅人多く立よりて  
 六⑦秋風にかくて暫忘れぬればすゑ遠き道なれども  
 七①こえはてぬれば不破の関屋なり  
 七③風情もめぐらしがたければいやしきことの葉をのこさん  
 七⑥夜更るほどに川端に立出てみれば秋の最中の晴天清き河  
 瀬にうつろひて  
 七⑨いとゞをさへがたくおぼゆれば月のかげに筆を染つゝ

- 八①かやつての東宿の前を過ればそこの人あつまりて  
 八⑦神垣のあたりちかければやがてまいるておがみ奉るに  
 一〇⑦三河国八橋のわたりをみれば在原業平かきつばたの歌よ  
 みたりけるに
- 一一⑨ほむの川原にうち出たればよもの望かすかにして山なく  
 隅なし
- 一二⑪思ひよりて植をかれたる柳なればこれを見む輩皆かの召  
 公を忍びげん
- 一三③ある者のいふをきけば此みちをば昔よりよくなるかたな  
 りし程に
- 一四②橋本と云所に行つきぬればきゝわたりしかひありて
- 一五⑨すゑ遠き野原なればつくゞとながめゆくほどに
- 一五⑩うちつれたる旅人のかたるをきけばいつのころよりとは  
 しらず
- 一六③聞あへずその御堂へ参りたれば不断香の煙風にさそはれ
- 一六④計帳の紐に結びつけたれば弘誓のふかき事うみのごとし
- 一六⑨舟のさること速なれば往還の旅人たやすくむかひの岸に  
 つきがたし
- 一六⑬人の心にくらぶればしづかなる流ぞかし
- 一七④棹さしつゝ浦の有さま見めぐればしほ海湖の間に洲崎遠  
 くへだたりて
- 一八①よこほりふせるとよまれたれば名高き名所なり
- 一八⑫柱にかゝれたりけりと聞きたればいとあはれにて
- 一九⑥奥より大井川を見渡したれば遙々とひろき河原の中に
- 一九⑧よそめおもしろくおぼゆればかの紅葉みだれて
- 二〇③宇津の山をこゆればつたかえではしげりて
- 二〇⑤道のはとりに札をたてたるをみれば無縁の世すて人ある  
 よしをかけり
- 二〇⑥近きあたりなれば少打入てみるに
- 二〇⑨発心のはじめを尋きけばわが身はもと此國のものなり
- 二〇⑩其身堪たるかたなれば理を觀するに心くらく
- 二一⑪心とまりておぼゆればそのかたはらにかきつけし
- 二二①人にたづぬれば梶原が墓となむ
- 二二⑧身をほろぼすべきになりければひとまとのびんとや  
 おもひけむ
- 二三④過うくてしほしやすらへば沖の石村々塩干にあらはれて
- 二三⑪山をすぐと云唐の歌を詠じければ民部卿泪をながしける
- 二四①海に向ひたる家やどりて侍ればいそべによする波の音  
 も身のうへにかゝるやうにおほえて
- 二四⑥草の枕のまるぶしなれば寢覺ともなき曉の空に出ぬ
- 二四⑧うちする波もひまなければいそぐ塩干のつたひみち
- 二四⑭障子に物をかきたるをみれば旅衣すそのの庵のさむしろ  
 に
- 二五⑧田子の浦にうち出てふじの高ねを見れば時わかぬゆきな  
 れども
- 二七④見渡せば千本の松の末遠み
- 二七⑥或家にやどりたれば網つりなどいとなむ賤しきものす  
 みかにや

二七⑫伊豆の国府にいたりぬれば三嶋の社のみしめうちおがみ奉るに

二八⑬あら人神の御なごりなればゆふだすきかけまくもかしかくおほゆ

くおほゆ

二八⑭かぎりある道なればこの御をも立出で

二八⑮うれしき便なればうき身の行衛するべさせ給へ

二九⑯湯本と云所にとまりたれば太山おろしはげしくうちしぐれて

れて

二九⑰暮かゝるほどに下りつきぬればながしのいりとかやいふ所に

ふ所に

三〇⑱三浦のみさきなどいふ浦々を行てみれば海上の眺望哀を催して

催して

三〇⑲抑かまくらのはじめを申せば故右大将家と聞え給ふ

三一⑳やがていざなひてまいりたればたふとくありがたし

三一㉑此阿弥陀は八丈の御長なればかの大仏のなかばよりもすぐめり

ぐめり

三二⑳やすがもなきかずならぬ身なれば日をふるまゝにはたゞ都のみぞこひしき

都のみぞこひしき

三四㉒なれぬれば都を急ぐ今朝なれと

ばかり

六⑥美に身にしむばかりなり

七⑦照月なみも数みゆばかりすみ渡れり

八⑧里もひゞくばかりにのゝしりあへり

二三⑬関とはしらて行人も心計はとゝめをくらむ

二七⑧床のさむしろもかけるばかりなり

二八⑦駒もなづむばかり也

へ

一⑩都を出て東へ赴く事あり

四④西東へ遥にながき堤あり

一五⑮鎌倉へくだる筑紫人有けり

一五⑭本意をとげて古郷へむかはゞ

一六②聞あへずその御堂へ参りたれば

一八⑨東へくだられけるに此宿にとまりけるが

二二⑨都のかたへはせのぼりけるほどに

二二⑪讃岐の法皇配所へおもむかせ給ひて

二六②西東へはるゝとながき沼あり

三三⑨とみの事ありて都へかへるべきになりぬ

三三⑫故郷へ帰る山ちのこからしに

三三⑭鎌倉をたちて都へおもむくに

へ

べし

一②いづこに住はつべしとおもひさだめぬ

二八⑩鏡塘の水心寺ともいひつべし

三三⑨これも不思議といひつべし

べき



五③ おくぎまにとふべき所ありてうち過ぬ

一一⑩ 行末もまよひぬべきに

一五⑭ 御堂をつくるべきよし心のうちに

一六⑬ たとふべきかたなきは世にふる道のけはしき習ひ也

二二⑧ 身をほるほすべきになりければ

二二⑥ おもひ出ともなりぬべきわたり也

三二⑫ つるにすみはつべきよすがもなきかずならぬ身なれば

三二⑬ 帰べきほどとおもひしもむなく過行て

三三⑥ かへるへき春をたのむの雁かねも

三三⑨ とみの事ありて都へかへるべきになりぬ

まし

まし 田

一七⑦ 心とまらずしもあらざらましなど

まし 困

九⑨ 思ひ出のなくてや人のかへらまし

二一⑥ 世をいとふ心のおくや濁らまし

せい

一⑥ 柴の庵までもしばらく思ひやすらふ程

二⑩ いにしへのわらやの床のあたり迄心をとむる相坂の関

六⑤ 余り涼しきまですみわたりて

一一⑬ 陰とたのむまではなけれども

一一③ もろくの民にいたるまでそのもとをうしなはず

一一⑤ 召公去にし跡までも彼木を敬て敢てきらず

一一⑭ 往還の陰までも思ひよりにて植をかけたる柳

二二③ なぐさめまでも思ひたえたるさまなり

二四⑨ ほすまもなき袖のしづくまではかけてもおもはざりし

三二⑥ 池のありとにいたるまで殊に心とまりてみゆ

まほし

まほしく 困

五② 宿もからまほしく覚えけれども

む

ま困

一三⑨ あれまくおしく覚ゆれ

む 田

五① 鏡山いさたちよりてみてゆかむ

五④ たちよらてけふは過なん

七⑭ かゝる旅ねの月をみんとは

九⑦ 古郷にかへらんとする期

一一⑩ 東路はこゝをせにせん

一一⑫ 我も又こゝをせにせん

二二⑧ ひとまどものびんとやおもひけむ

二四⑭ をくれたる者まちつけんとて

む 困

五⑭ 下くさふかき朝つゆの霜にかはらん行すゑも

- 六⑧立さらん事はものうくて更にいそがれず  
 七④いやしきことの葉をのこさんも中々におぼえて  
 八④みてのみや人にかたらんとよめる  
 一一①三河の八はしを恋しとのみや思ひわたらん  
 一一⑩一千余里を見わたしたらんこゝちして  
 一一⑪月の夜の望いかならんと床しくおぼゆ  
 一一⑫これを見む輩皆かの召公を忍びけん  
 一一⑬行すゑのかけとたのまむこと  
 一三②猶その陰を人やたのまん  
 一三⑦いかなるゆへならんとおぼつかなし  
 一三⑧昔より住つきたる里人の今更るうかれんこそ  
 一九⑧中々わたりてみむよりもよそめおもしろく  
 二二⑬かゝらむのちはなにゝかはせんと  
 二二⑬かゝらむのちはなにゝかはせんと  
 二三⑦是をたひらげんために民部卿忠文をつかはしける  
 二六⑩神仙のすみかにもやあらん  
 二七⑪いとふありかや袖のこらん  
 三三⑬おもはぬほかの錦をやきむ  
 cf. かけまく

## めり

## めり

三二⑦かの大仏のなかばよりもすぐめり

## も

- 一③住はつべしともおもひさだめぬありさまなれば  
 一⑥柴の庵までもしばらく思ひやすらふ程  
 二①わすれず忍ぶ人もあらば  
 二①をのづから後のかたみにもなれとてなり  
 二③望月の比も漸近き空なれば  
 三③さだかにも見わからず  
 三⑤大津の宮をつくられけりとときくにも……あはれなり  
 三⑭このほどをも行過て野路と云所にいたりぬ  
 四⑥波の色もひとつになり  
 四⑩家居もまばらに成行など聞こそ  
 四⑫行人もとまらぬ里となりしより  
 五②宿もからまほしく覚えけれども  
 五⑨ねざめもかくや有けむと哀なり  
 五⑪都出ていくかもあらぬこよひたに  
 五⑭朝つゆの霜にかはらん行すゑもはかく移る月日なれば  
 六②かはらしな我もとゆひに置霜も名にしいその杜の小草  
 六⑨たちとまりつれとよめるもかやうの所にや  
 六⑬美濃国関山にもかゝりぬ  
 六⑭日影もみえぬ木の下道あはれに心ぼそし  
 七②年経にけりとみゆるにも……よませ給へる歌おもひ出ら  
 れて  
 七③此うへは風情もめぐらしがたければ

- 七④ いやしきことの葉をのこさんも中におぼえて  
 七⑦ 照月なみも数みゆばかりすみ渡れり  
 七⑬ しらさき秋の半の今宵しもかゝる旅ねの月をみんとは  
 八① 里もひゞくばかりにのゝしりあへり  
 八③ 手毎にむなしからぬ家づとも  
 八⑤ 花ならぬ色香もしらぬ市人の  
 八⑩ 物にふれて神さびたる中にも  
 八⑪ かずもしらず梢にきゐるさま  
 八⑬ しづまり行声ごゑも心すく聞ゆ  
 八⑭ 大和言葉も是よりはじまりけり  
 九④ 剣は熟田にとまり給ふともいへり  
 一〇③ 波も空もひとつにて  
 一〇④ 波も空もひとつにて  
 一一③ 家を出けるも哀に思ひいでられて  
 一一⑤ まよひの心をしもしるべとし  
 一一⑦ 別路に茂りもはてゝ葛のはの  
 一一⑫ 行末もまよひぬべきに  
 一二⑬ 植をかれたる柳もいまだ陰とたのむまではなけれども  
 一二⑭ 道のしるべとなれるもあはれなり  
 一二④ おもき罪をもなだめけり  
 一二⑤ 召公去にし跡までも彼木を敬て敢てきらず  
 一二⑨ たまはせたりけるも此こゝろにや  
 一二⑩ かの前の司も此召公の跡を追て人をはぐくみ  
 一二⑪ 陰までも思ひよりて植をかれたる柳なれば
- 一四① 音もたかしの山にきにけり  
 一四⑧ 名残いづくよりも心ぼそし  
 一四⑨ 行とまる旅ねはいつもかはらねと  
 一四⑫ 月のかけ曇なくさし入たる折しも君どもあまたみえし中  
 に  
 一五④ 此宿をもうち出て行過るほどに  
 一五⑥ 錦花繡草のたぐひはいともみえず  
 一五⑫ 雨露もたまらず年月を送るほどに  
 一六③ あかの花も露鮮なり  
 一六⑤ うみのごとしといへるもたのもしくおぼえて  
 一六⑦ たのもしな入江に立るみをつくし深き験の有と聞にも  
 一六⑩ ふねなどもをのづからくつがへりて  
 一六⑬ しづかなる流ぞかしとおもふにもたとふべきかたなきは  
 一七① 此河のはやき流も世中の人の心のたくひとは見す  
 一七⑦ 是も心とまらずしもあらざらまし  
 一七⑦ 是も心とまらずしもあらざらまし  
 一七⑨ 浪の音も松の嵐もいまの浦に  
 一七⑨ 浪の音も松の嵐もいまの浦に昨日の里の名残をそきく  
 一八⑧ 此山をもこえつゝ猶過行ほどに  
 一八⑬ かの言のはものこらずと申も今はなかりけり  
 一九② かきつくるかたみも今はなかりけり  
 一九④ 菊川をわたりていくほどもなく  
 一九⑧ みむよりもよそめおもしろくおぼゆれば  
 一九⑪ わたらぬ水も深き色かな

- 一九⑭旅ごろもうすき袂もさむくおぼゆ  
 二〇⑩さしておもひはなれたる道心も侍らぬうへ  
 二一②殊更煙たてたるよすがもみえず  
 二二③なぐさめまでも思ひたえたるさまなり  
 二三⑩哀もふかし鶯のした道とよめる  
 二四⑫我も又こゝをせにせんうつ山  
 二五②土と成にけりと見ゆるにも  
 二六③是も又ふるきつかとなりなば  
 二七④名だにも残らじとあはれ也  
 二八⑤こゝにもなみだをやおとすらむ  
 二九⑧ひとまどものびんとやおもひけむ  
 三〇⑬よしや君昔の玉の床とてもかゝらむのちはなにゝかはせ  
 三十一  
 三十二  
 三十三  
 三十四  
 三十五  
 三十六  
 三十七  
 三十八  
 三十九  
 四十  
 四十一  
 四十二  
 四十三  
 四十四  
 四十五  
 四十六  
 四十七  
 四十八  
 四十九  
 五十  
 五十一  
 五十二  
 五十三  
 五十四  
 五十五  
 五十六  
 五十七  
 五十八  
 五十九  
 六十  
 六十一  
 六十二  
 六十三  
 六十四  
 六十五  
 六十六  
 六十七  
 六十八  
 六十九  
 七十  
 七十一  
 七十二  
 七十三  
 七十四  
 七十五  
 七十六  
 七十七  
 七十八  
 七十九  
 八十  
 八十一  
 八十二  
 八十三  
 八十四  
 八十五  
 八十六  
 八十七  
 八十八  
 八十九  
 九十  
 九十一  
 九十二  
 九十三  
 九十四  
 九十五  
 九十六  
 九十七  
 九十八  
 九十九  
 一百

ん

- 二五①つもるもしるきふしのしら雪という歌なり  
 二五⑤かれもこれもともに心すみておぼゆ  
 二五⑤かれもこれもともに心すみておぼゆ  
 二五⑤冴る夜に誰こゝにしもふしわひて高根の雪を思ひやりけ  
 二六⑩絵の山よりもこよなうみゆ  
 二六①浮嶋が原はいづくよりもまざりてみゆ  
 二六③影を浸して空も水もひとつ也  
 二六③影を浸して空も水もひとつ也  
 二六⑥かなたの眺望いづれもとどろくゝに心ぼそし  
 二六⑨浮嶋となん名付たりと聞にも  
 二六⑩神山のすみかにもやあらん  
 二六⑫煙も雲も浮嶋かはら  
 二六⑫煙も雲も浮嶋かはら  
 二六⑭生わたりてみどりの陰きはもなし  
 二七②彼も是もはづれず  
 二七②彼も是もはづれず  
 二七②彼も是もはづれず  
 二七②眺望いづくにもまざりたり  
 二七⑧床のさむしろもかけるばかりなり  
 二七⑧かの縛戎人の夜半の旅ねもかくやありけむとおぼゆ  
 二七⑯庭の気色も神さびわたれり  
 二七⑭三嶋大明神をうつし奉ると聞にも  
 二八②枯たる稲葉もたちまちに縁にかへりける  
 二八③ゆふだすきかけまくもかしこくおぼゆ

- 二八⑥この砌をも立出て猶ゆきすぎるほどに  
 二八⑦宮根の山にもつきにけり  
 二八⑦駒もなづむばかり也  
 二八⑨又蘆の海といふもあり  
 二八⑪錢塘の水心寺ともいひつべし  
 二九②此山もこえおりて湯本と云所に  
 二九④暢臥房のよるのきゝにもすぎたり  
 二九⑧此宿をもたちて鎌倉につく日の夕つかた  
 二九⑨みかさもとりあへぬほど也  
 二九⑩もころしが原など聞ゆる所々をも見とゞむる  
 二九⑩見とゞむるひまもなくてうち過ぬること  
 三〇③つれづれもなぐさむやとて  
 三〇⑤面白き所々にもをとらずおぼゆ  
 三〇⑥さひしさは過こしかたの浦々もひとつなかめの沖のつり
- 舟
- 三一①中にも鶴岡の若宿は  
 三一⑥天竺震旦にもたぐひなき仏像とこそきこゆれ  
 三一⑦かの大仏のなかばよりもすぐめり  
 三一⑧これも不思議といひつべし  
 三二⑪かやうのことどもを見聞にも  
 三二⑪心とまらずしもはなけれども  
 三二⑫文にもくらく武にもかけて  
 三二⑫文にもくらく武にもかけて  
 三二⑫よすがもなきかずならぬ身なれば

- 三二⑭おもひしむなしく過行て  
 三二⑭秋より冬にもなりぬ  
 三三②聞なれし虫の音もやゝよはりはてて  
 三三③都のかたをながめやる折しも  
 三三⑤一行の雁がね空に消ゆくも哀なり  
 三三⑥かへるへき春をたのむの雁かねもなきてや旅の空に出に  
 し
- 三三⑨水ぐきのとにもかきながしがたし
- ものから
- 八⑫遠く白きものから暮行まゝにしづまり行声ごゑも心すこ  
 く聞ゆ
- や(詠嘆)
- 三⑦さゝ波や大津の宮のあれしより
- や(疑問)
- 四②東路の野ちの朝露けふやさは袂にかゝるはしめ成覽  
 五②年へぬる身は老やしぬると  
 五②此山の事にやとおぼえて宿もからまほしく  
 五⑨草の庵のねぎめもかくや有けむ  
 六⑩しはしとてこそたちとまりつれとよめるもかやうの所に  
 や
- 八③かのみてのみや人にかたらんとよめるも

- 九⑨ 思ひ出のなくてや人のかへらまし  
 一〇⑩ 花ゆへにおちし涙のかたみとや  
 一〇⑭ 恋しとのみや思ひわたらん  
 一一⑨ 此こゝろにや有けんいみじくかたじけなし  
 一二② 柳はら猶その陰を人やたのまん  
 一五⑧ 漁人釣客などの栖にやあるらん  
 一五⑪ 御堂など朽あれにけるにや  
 二一⑥ 世をいとふ心のおくや濁らまし  
 二二⑤ こゝにもなみだをやおとすらむ  
 二二⑨ ひとまともものびんとやおもひけむ  
 二五② たび人のしわざにやあるらん  
 二六⑩ をのづから神仙のすみかにもやあらん  
 二七⑦ 賤しきものすみかにや  
 二七⑧ 夜半の旅ねもかくやありけむ  
 二七⑪ いとふありかや袖にのこらん  
 三〇③ つれづれもなぐさむやとて  
 三三⑦ 雁かねもなきてや旅の空に出にし  
 三三⑬ おもはぬほかの錦をやきむ

## やうなり

## やうに困

- 八⑩ 雪のつもれるやうに見えて  
 一〇④ 山路につゞきたるやうに見ゆ  
 二四① 身のうへにかゝるやうにおぼえて

二七① 木のはのうけるやうにみゆ

## やうなり

四⑨ とびちがふさまあしでをかけるやうなり  
 やうなる困

一九⑤ すこしうちのぼるやうなる奥より

## よ

一〇⑧ なみだおとしける所よとおもひ出られて

二二⑩ さはこゝにて有けるよと哀に思ひあはせらる

## より

三④ 大和国飛鳥の岡本の宮より近江の志賀の郡に都うつりあ

## り

三⑦ 大津の宮のあれしより名のみ残れるしかのふる郷

四⑫ 行人もとまらぬ里となりしより荒のみまさるのちの篠原

六④ 陰くらき木のしたのいはねより流出る清水

八⑧ 杜の木の間より夕日のかげたえだえさし入て

八⑭ 大和言葉も是よりはじまりけり

二③ つかさ人よりはじめてもろくの民に

三④ 此みちをば昔よりよくるかたなかりし程に

三④ 近比より俄にわたふ津の今道と云かたに

三⑧ 昔より住つきたる里人の今更るうかれんこそ

一四⑧ 朝たつ雲の名残いづくよりも心ぼそし

一四⑫ まばらなるひまより月のかげ曇なく

一五⑩いつのころよりとはしらず

一六②御堂を造けるより人多くまいるなどぞいふなる

一八③谷より嶺にうつるみち雲に分入心地して

一九⑤奥より大井川を見渡したれば

一九⑧中々わたりてみむよりもよそめおもしろく

二〇⑥みちより近きあたりなれば少打入てみるに

二五⑨絵の山よりもこよなうみゆ

二六①浮嶋が原はいづくよりもまさりてみゆ

二八①炎早の天よりあめにはかにふりて

二八⑭今よりは思ひ乱し蘆の海の

三〇⑧三浦かさきの波まより出たる月の影のさやけさ

三〇⑫朝敵をなびかすより恩賞しきりに

三〇⑭仏神をそのみぎりにあがめ奉るよりこのかた

三一⑥楼台の莊嚴よりはじめて林池のありとにいたるまで

三一⑧道場のあらたなるをひらきしより

三二①過にし延応の比より関東のたかきいやしきを

三二⑦かの大仏のなかばよりもすぐめり

三二⑭むなく過行て秋より冬にもなりぬ

らむ

らむ田

二三⑬関とはしらて行人も心計はとゝめをくらむ

らむ困

四③野ちの朝露けふやさは袂にかゝるはしめ成覽

一〇⑫花ゆへにおちし涙のかたみや稲葉の露を残しをくらん

一五⑧漁人釣客などの栖にやあるらん

二〇④いづくなるらんと見行ほどに

二二⑤こゝにもなみだをやおとすらん

二五②たび人のしわざにやあるらん

らむ

られ困

二四②夜もすがらいねられず

られ困

三⑪海を望みつゝよめりけん歌おもひ出られて

五⑩思ひつゝけられていといたう物がなし

七③たゝ秋の風とよませ給へる歌おもひ出られて

一〇⑨なみだおとしける所よとおもひ出られて

一一①おもひ出られてあはれなれ

一一④哀に思ひいでられて過がたし

一六⑫おもひよせられていと危き心ちすれ

一七⑫いさゝかおもひつゞけられし

二二③春の草のみ生たりといへる詩思ひいでられて

二四⑩打ながめられつゝいと心ほそし

二九⑨いそぐ心にのみすゝめられて

三一⑩つくりそへられたる松の社蓬の寺

らむ田

一④あはれにおもひあはせらる

- 二⑤ 函谷の有様おもひいでらる
- 二二⑪ 哀に思ひあはせらる

り

り

- 三⑩ 此海を望つゝよめりけん歌おもひ出られて
- 一一① 思ひわたらんとよめりけるこそ
- 二二② 頭基中納言の口ずさみ給へりけん
- 二二⑭ よめりけるなどうけ給はるに

り

- 一⑧ 人並に世にふる道になんつらなれり
- 二⑨ 四宮河原と名付たりといへり
- 六⑦ 往還の旅人多く立よりてすゞみあへり
- 七⑧ 照月なみも数みゆばかりすみ渡れり
- 八② 里もひゞくばかりにのゝしりあへり
- 九① この砌に跡をたれ給へりといへり
- 九① この砌に跡をたれ給へりといへり
- 九④ 剣は熱田にとまり給ふともいへり
- 一〇③ 海の面はるかにあらはれわたれり
- 一四④ 人家岸につらなれり
- 二〇⑥ 無縁の世すて人あるよしをかけり
- 二〇⑧ 浄土の法もんなどをかけり
- 二二① 一瓢の器をかけたれといへり
- 二三⑤ 風にさそはれて煙たなびけり

- 二七⑬ 庭の気色も神さびわたれり

- 二八⑧ 水うみ広くたゝへり

- 三〇⑭ 今繁昌の地となれり

る

- 一④ 首は霜ににたりと書給へるあはれにおもひあはせらる
- 三⑧ 名のみ残れるしかのふる郷
- 四⑧ あしかつみなどおひわたれる中に
- 四⑨ とびちがふさまあしでをかけるやうなり
- 五② 老やしぬるといへるは此山の事にやと
- 六⑨ しはしとてこそたちとまりつれとよめるも
- 七③ よませ給へる歌おもひ出られて
- 八④ 人にかたらんとよめる花のかたみには
- 八⑩ 雪のつもれるやうに見えて
- 八⑭ 八雲たつといへる大和言葉も
- 九⑫ 千鳥ときどきをとづれわたれる
- 一一⑪ 茂れるさゝ原の中にあまたふみわけたる道ありて
- 一一⑭ まづ道のしるべとなれるもあはれなり
- 一三⑦ さだまれることといひながら
- 一四⑦ みづうみにわたせる橋を浜名となづく
- 一五⑦ 白き真砂のみありて雪の積れるに似たり
- 一六⑤ 弘誓のふかき事うみのごとしといへるも
- 一六⑩ 此河みづまされる時
- 一八① よこほりふせるとよまれたれば
- 二〇⑫ 山の中に眠れるは里にありて勤たるにまされる



二〇⑫里にありて勤たるにまされるよし

二一④心を淨域の雲の外にすませるいはねどしるくみえて

二二⑩鶯のした道とよめる心とまりておほゆれば

二三③春の草のみ生たりといへる詩思ひいでられて

二四④夜衣をかたしきて山の雪をおもへる

二五⑨青して天によれるすがた絵の山よりも

二六②ながき沼あり布をひけるがごとし

二六⑥遠帆の空につらなれるをのぞむ

二七①木のはのうけるやうにみゆ

二七②一葉の舟中万里身とつくれるに

二七⑧床のさむしろもかけるばかりなり

二八⑩朱楼紫殿の雲にかさなれる粧ひ

二八⑪巖室石龕の波にのぞめるかげ

二九⑤滝のをとかなといへる思ひよられてあはれなり

三三③峯のあらしのみぞいとゞはげしくなりまされる

る

れ困

六⑧立さらん事はものうくて更にいそがれず

れ困

三⑤大津の宮をつくられけりとまきにも

七⑧古人の心遠く思ひやられて

一一⑬古武蔵の前司道のたよりの輩に仰て植をかれたる

一二⑭思ひよりて植をかれたる柳なれば

一六③不断香の煙風にさそはれうちかほり

一八①よこほりふせるとよまれたれば

一八⑨罪ありて東へくだられけるに

一八⑫ある家の柱にかゝれたりけりと

二二⑩駿河国きかはといふ所にてうたれにけり

二三⑤風にさそはれて煙たなびけり

二六④南は海のおもて遠くみわたされて

二八⑩唐家驪山宮かとおどろかれ

二九⑤思ひよられてあはれなり

三三③懐古のこゝろに催されて

る困

一九⑨竜田川ならねどもしばしやすらはる

三一③職掌に仰て八月の放生会ををこなはる

る困

三三②三千里のみちの思ひ身にしらるる心ちす

を

一⑤金帳七葉のさかへをこのます

一⑤たゞ陶潜五柳のすみかをもとむ

一⑩都を出て東へ赴く事あり

一⑪はるゞ遠き旅なれども雲をしのぎ

一⑪霧を分つゝしばしば前途の極なきにすゝむ

一⑫終に十余の日数をへて鎌倉に下り着きし間

一⑭心とまるふしゞをかき置て

- 二②東山の辺なる住家を出て相坂の関うち過るほどに  
 二⑥此関の辺にわらやの床を結びて  
 二⑥常は琵琶をひきて心をすまし  
 二⑥常は琵琶をひきて心をすまし  
 二⑥大和歌を詠じておもひを述けり  
 二⑦大和歌を詠じておもひを述けり  
 二⑦嵐のかぜはげしきをわびつゝぞすぐしける  
 二⑨此関のあたりを四宮河原と名付たり  
 二⑪心をとむる相坂の関  
 二⑫関の清水を過させ給ふとて  
 二⑬けふをかきりの影そかなしき  
 三②関山を過ぬれば打出の浜粟津の原なんどきけども  
 三④大津の宮をつくられけりとくにも  
 三⑩此海を望つゝよめりけん歌おもひ出られて  
 三⑫世中を漕行舟によそへつゝ  
 三⑬ななめし跡を又そななむる  
 三⑭このほどをも行過て野路と云所にいたりぬ  
 四④しの原と云所をみれば  
 四⑤北には里人住家をしめ南には池のおもて遠く  
 四⑥南山の影をひたさねども青くして  
 四⑧あしでをかけるやうなり  
 四⑨都をたつ旅人この宿にこそとまりけるが  
 四⑭老をいとひてよみける歌の中に  
 五⑬この宿をいでて笠原の野原うちとをるほどに

- 六④音にきゝしきめが井を見れば  
 六⑬かしは原と云所をたちて  
 七④いやしきことの葉をのこさんも  
 七④爰をばむなしくうち過ぬ  
 七⑨月のかげに筆を染つゝ  
 七⑨花浴を出て三日株瀬川に宿して一宵  
 七⑩幽吟を中秋三五夜の月にいたましめ  
 七⑪遠情を先途一千里の雲にをくるなど  
 七⑭かゝる旅ねの月をみんとは  
 八①かやつ東宿の前を過れば  
 八⑨あけの玉垣色をかへたるに  
 九①この砌に跡をたれ給へりといへり  
 九②夷をたいらげて帰り給ふ時  
 九⑤大般若を書て此宮にて供養をとげける  
 九⑤此宮にて供養をとげける願文に  
 九⑩法の形見をたむけをかすは  
 九⑪この宮をたち出浜路におもむくほど  
 九⑭古郷は日をへて遠くなるみかた  
 一〇②山中などをこえ過るほどに  
 一〇⑦三河国八橋のわたりをみれば  
 一〇⑨そのあたりをみれどもかの草とおぼしき物はなくて  
 一〇⑫稲葉の露を残しをくらん  
 一〇⑭三河の八はしを恋しとのみや思ひわたらん  
 一一②やはぎといふ所をいでて

- 一一③大江定基が家を出けるも哀に思ひいでられて  
 一一⑤あかぬ別をおししまよひの心を  
 一一⑤まよひの心をしもしるべとし  
 一一⑩秦甸の一千余里を見わたしたらんこゝちして  
 一一①燕と云国をつかさどりき  
 一一②陝のにしのかたを治し時  
 一一②ひとつの甘棠のもとをしめて  
 一一②政ををこなふ時  
 一一④そのもとをうしなはず  
 一一④あまねく又人の患をことわり  
 一一④おもき罪をもなだめけり  
 一一⑤国民挙りて其徳政を忍ぶ故に  
 一一⑥彼木を敬て敢てきらず  
 一一⑥うたをなんつくりけり  
 一一⑧甘棠の詠をなすとも忘るゝことなかれ  
 一一⑨御製をたまはせたりけるも  
 一一⑩かの前の司も此召公の跡を追て  
 一一⑩人をはぐくみ物を憐むあまり  
 一一⑩物を憐むあまり  
 一一⑫これを見む輩皆かの召公を忍びけん  
 一一⑫かの召公を忍びけん  
 一一②猶その陰を人やたのまん  
 一一③豊河と云宿の前をうち過るに  
 一一③ある者のいふをきけば  
 一一③此みちをば昔よりよくるかたなかりし  
 一一⑤人の家居をさへ外にのみうつすなどぞいふなる  
 一一⑥ふるきをすててあたらしきにつくならひ  
 一一⑩いさ豊河のかはる瀬をいかなる人のわたりそめけん  
 一一④行人心をいたましめ  
 一一④とまるたぐひ夢をさまさずといふ事なし  
 一一④みづうみにわたせる橋を浜名となづく  
 一一④床の下に晴天をみると忍びやかに  
 一一④此宿をもち出て行過るほどに  
 一一⑩うちつれたる旅人のかたるをきけば  
 一一⑫雨露もたまらず年月を送るほどに  
 一一⑭もしこの本意をとげて古郷へむかはゞ  
 一一⑭御堂をつくるべきよし心のうちに申置て  
 一一①御堂を造けるより人多くまいるなどぞいふなる  
 一一⑤南には極浦の波袖を湿し  
 一一⑥北には長松の嵐心をいたましむ  
 一一⑩昨日の里の名残をそきく  
 一一⑪その御前をすぐとて  
 一一⑭ゆふたすきかけてそ頼む今思ふことのまゝなる神のしる  
 しを  
 一一④鹿の首なみだをもよほし  
 一一⑧此山をもこえつゝ猶過行ほどに  
 一一⑩昔は南陽県の菊水下流を汲で  
 一一⑩南陽県の菊水下流を汲で齡をのぶ

- 一八⑪ 菊川西岸に宿して命をうしなふ  
 一八⑫ いとあはれにて其家を尋るに  
 一九④ 菊川をわたりていくほどもなく  
 一九⑥ 大井川を見渡したれば  
 一九⑦ すながしといふ物をしたるにたり  
 一九⑫ まへ嶋の宿をたちて岡部のいまずくを  
 一九⑬ 岡部のいまずくをうち過るほど  
 二〇③ 宇津の山をこゆればつたかえではしげりて  
 二〇⑤ 道のほとりに札をたてたるをみれば  
 二〇⑤ 札をたてたるをみれば無縁の世すて人  
 二〇⑥ 無縁の世すて人あるよしをかけり  
 二〇⑦ 画像の阿弥陀仏をかけ奉て  
 二〇⑧ 浄土の法もんなどをかけり  
 二〇⑧ 発心のはじめを尋きけば  
 二〇⑩ 理を観ずるに心くらく  
 二〇⑪ 仏を念ずるに性ものうし  
 二〇⑬ 此山に庵を結つゝ  
 二〇⑭ 年月ををくるよしをこたふ  
 二〇⑭ 年月ををくるよしをこたふ  
 二〇⑭ 叔斎が首陽の雲に入て猶三春の賊をとり  
 二一① 一瓢の器をかけたるといへり  
 二一③ 身を孤山の嵐の底にやどして  
 二一③ 心を浄域の雲の外にすませる  
 二一⑥ 世をいとふ心のおくや濁らまし
- 二一⑩ 東路はこゝをせにせん宇津の山  
 二一⑫ 我も又こゝをせにせんうつつ山  
 二一⑭ ある木陰に石をたかくつみあげて  
 二二⑤ こゝにもなみだをやおとすらむ  
 二二⑥ 武勇三略の名を得たり  
 二二⑧ たちまちに身をほろぼすべきに  
 二二⑫ 御跡を西行修行のついでに  
 二三③ 道のへにしも名をとゝめけり  
 二三⑦ 是をたひらげんために民部卿忠文を  
 二三⑧ 民部卿忠文をつかはしける  
 二三⑩ 漁舟の火のかけは寒くして浪を焼  
 二三⑩ 駅路の鈴の声はよる山をすぐと云唐の歌  
 二三⑪ 唐の歌を詠じければ  
 二三⑪ 民部卿泪をながしけると聞にも  
 二四⑦ あら磯の岩のはぎまを行過るほどに  
 二四⑬ 神原といふ宿のまへをうちとをるほどに  
 二四⑭ 障子に物をかきたるをみれば  
 二四⑭ 障子に物をかきたるをみれば  
 二五② 香爐峯の麓に庵をしむる隠士あり  
 二五③ 冬の朝簾をあげて峯の雪を望けり  
 二五③ 冬の朝簾をあげて峯の雪を望けり  
 二五④ 富士の山にあたり宿をかる行客あり  
 二五④ さゆる夜衣をかたしきて  
 二五④ 衣をかたしきて山の雪をおもへる

- 二五⑦高ねの雪を思ひやりけん  
 二五⑧田子の浦にうち出てふじの高ねを見れば  
 二五⑨ふしのねの風にたゞよふ白雲を天津乙女の袖かとぞみる  
 二六②沼あり布をひけるがごとし  
 二六③山のみどり影を浸して  
 二六④速帆の空につらなれるをのぞむ  
 二七④伊予の国三嶋大明神をうつし奉る  
 二八⑥この砌をも立出て猶ゆきすぐるほどに  
 二九①深きめくみを神にまかせて  
 二九⑥夫ならぬたのみはなきを古郷の夢路ゆるさぬ滝の音哉  
 二九⑧此宿をもたちて鎌倉につく日の夕つかた  
 二九⑩聞ゆる所々をも見とゞむるひまもなくて  
 二九⑬あやしの賤が庵をかりてとゞまりぬ  
 三〇④三浦のみさきなどいふ浦々を行てみれば  
 三〇⑤海上の眺望哀を催して  
 三〇⑩抑かまくらのはじめを申せば  
 三〇⑪九の世のはつえをたけき人にうけたり  
 三〇⑫義兵をあげて朝敵をなびかすより  
 三〇⑬義兵をあげて朝敵をなびかすより  
 三〇⑭恩賞しきりに隴山の跡をつぎて  
 三〇⑮將軍のめしをえたり  
 三〇⑯宮館をこの所にしめ  
 三〇⑳仏神をそのみぎりにあがめ奉る  
 三一②陪従をさだめて四季の御かぐらをこたらず  
 三一③八月の放生会ををこなはる  
 三一⑦石巖のきびしきをきりて  
 三一⑧道場のあらたなるをひらきしより  
 三一⑧禅僧庵をならぶ  
 三一⑨月をのづから祇宗の観をとぶらひ  
 三一⑨行法座をかさね  
 三一⑩風とこしなへに金磬のひゞきをさそふ  
 三一⑫阿弥陀仏の大仏をつくり奉るよしかたる人あり  
 三一⑭事のおこりをたづぬるに  
 三二①関東のたかきいやしきをすすめて  
 三二①仏像をつくり堂舎を建たり  
 三二②仏像をつくり堂舎を建たり  
 三二③満月の光りをかゞやかす  
 三二⑨権化力をくはふるかとありがたくおぼゆ  
 三二⑪かやうのことどもを見聞にも  
 三二⑬日をふるまゝにはたゞ都のみぞこひしき  
 三二⑭蘇武が漢を別し十九年の旅の愁  
 三三④つくづくと都のかたをながめやる  
 三三⑥かへるへき春をたのむの雁かねも  
 三三⑩錦をきるさかひはもとよりのぞむ処にあらねども  
 三三⑬おもはぬほかの錦をやきむ  
 三三⑭鎌倉をたちて都へおもむくに  
 三四②なれぬれば都を急ぐ今朝なれと